



映画女優
ねじ巻依子の冒険

(1)

dai

大地の脈拍が大きく歪んだかと思うと

葡萄の魔王の大きな笑い声が聞こえた気がした。

[まようことはない]と葡萄の魔王が囁いた。

やつの姿は、まるで古代の鴉のよう

丘の葡萄畑を覆う影は、まるで夜の羽のようだ

その時、なぜかおれは三人であの坂を下ってきた日のことを思い出していた。

おれたちはその坂を「ジェルミーナの坂」と呼んでいた。

そこが始まりだった。

[ひきかえすことはない]と葡萄の魔王が囁いた。

やつの住処は、谷底に沈んでいた水晶の船だ。

こんなふうに眠れない夜には あの太鼓の音が今でも聞そこえるのか、

そこからどれだけ遠く、どれだけ遠くまで

僕たちが通ったジェルソの坂は、草むらの空き地に続いていた。

依子は、約束した時間通りに、夕暮れちかくに現れた。

髪を無造作に後ろでまとめていて、後れ毛が夕日でたまに黄金に輝いていた。

夜になるまでに僕たちは駅に向かった。

電車を待つようにホームで立っていたが、僕たち二人が待っていたのは別のものだ。

何本か電車をやり過ごし、結局最終の電車まで待っていたが、栗本は結局現れなかった。

最終の電車に僕たちは乗り込んだ。いつもの最後尾の車両に。

最後尾の車両の窓から見える線路の平行線が、銀色の2つの糸のように明るいホームから垂れているように見えた。

僕たちは無言で、その無現に後ろに伸びていく2本の平行な糸をじっと眺めていた。

高原の駅に着くと、駅のロータリーから、バスに乗った。

停留所でバスを降りると、そこは長いあぜ道の向こう側にポツンと街灯があるだけの寂しい夜の田んぼ道だ。

街灯の隙間の闇の中を僕たちは無言ですすんだ。

空にはものすごい数の星があった。

蛙の鳴き声を聞きながら。

虫に刺されながら。

星あかりを頼りに。

やがて、その山が目の前に現れた。

大きなマントをまとって跪いた巨人のように、

山の中腹から頂上あたりまで、

登山者の松明だろう、

流れる血のように赤い筋があった。

あれはまるで葡萄の魔王ね、

と、依子が言った。

葡萄の魔王で、名前はサミュエル、アダムが食べた葡萄の木を植えたのよ。

目的の谷底まで来ると、もう月明かりさえ届かない暗闇で、ぼくたちは用意していた懐中電灯で獣道をすすんだ。

そして、その場所についた。

水晶の塔だ。

それは巨大な筒型をしていた。

それほどの深い谷ではなかったけれど、深夜の水晶の塔は、まるでジャングルの中にたつ巨大なテトラポットのようだ。

塔の入り口を探し当てると、依子は振り返り、神妙な声色で言った。

来世で逢いましょう。

依子（1）過去

目がさめると、[天井](#)には竹竿のようなものがいくつもかかっていた。

なんて広い[天井](#)か。

依子は布団の中で目が覚めた。

体を起こそうとして、[自分の上半身](#)が思ったように動かないので、あらためて手で布団をめくると[自分が浴衣](#)を着ていることが分かった。

窓の[朝日](#)が障子にさしていた。

それで、ここにいる理由を思い出した。

部屋の隅にかかった[カレンダー](#)が目に入って、そこから[元号](#)は読み取ることができた。

「[昭和](#)」

急いで手順を反芻した。

なにか書くものを探した。

枕元に小さな[筆筒](#)がり、その上に[万年筆](#)が無[造作](#)に置かれている。立ち上がると、軽い[めまい](#)がした。

つづいて、[背中](#)のほうからずっしりと重いものが降りてきた。頭が[ぼんやり](#)して、手を伸ばした先の[万年筆](#)が、まるで針のようにちじんで見えた。

[背中](#)のすぐ後ろに、迫るものがあった。

そのものに飲み込まれる寸前に、[万年筆](#)に手が届いた。

書くものを探している暇はなかった。そのまま[筆筒](#)の上に思い切り筆先をつきたて、力をふりしぼり[筆筒](#)の表に、

[水晶](#)の塔を探さなければならない、

と書いたつもりだったが、筆先は折れ、それで、すべて[おしまい](#)だった。

依子、おきたの？ と年配の女性の声がした。

はい、と答え、自分は今、なにを見ていたのか、と訝った。

激しい痛みが右手にあった。

手を見ると、万年筆を握りしめ、その折れた筆先が手の甲を一本の線で切り裂いていた。

血がどくどくと流れ出ていた。

自分はいま、なにをしていたのだろう？

依子（2） 現在

目が覚めると電車の中だった。

地下鉄。

目の前にはサラリーマン風の男が吊革をつかんだまま眠っている。地下鉄にしては驚くほど静かな走行音だ。

揺れも少ない。これほど静かな電車には私は乗ったことがない。そこまで考えた時に、ここにいる理由を思い出した。

急いで手順を反芻した。

なにか書くものを探した。

だが、手には何も持っていない。

立ち上がった。

立ち上がったところで、電車の中ではなにもできやしない。

目の前のサラリーマンが、ぎょっとした顔で依子を凝視した。

そのまま、また、座るしかなかった。

まだちらちらと依子を観察している目の前の男の視線がうるさく、黒いトンネルでふたをされた電車の窓に目をやった。

依子さん、つきましたよ。

突然、目の前のサラリーマンがそう声をかけてきた。

そして網棚の上からハンドバックをとり、依子にさしだした。

どうしたんです？

急に立ち上がったりして？

男はハンドバックをぐいと依子に差し出した。

依子には言われるままに男の差し出すハンドバックをとった。

[水晶](#)の塔を探さなければならない。

[映画](#)は、3本作られていた。

[過去](#)

現在

[未来](#)

3作目の依子は、[未来の世界](#)にいるはずだった。

依子（3）未来

頭上には、まばらに星が見えた。足元には漆黒の闇が広がっていた。
私は星に向かって落下している。そんな考えたと同時に、[世界](#)が反転した。
訓練された体が[勝手](#)に反応し、両脇にある[レバー](#)を強く押さえつけていた。
次の瞬間、強烈に地面にたたきつけられたようなショックが続いた。

着地。

内臓が引っ繰り返るような強烈な[不快感](#)が襲ってきた。
[吐き気](#)が込み上げてくる。

今や星に見たのは、地上にあらかじめ打ち込められていた誘導灯[である](#)ことも分かっていた。
落下の[最中](#)に足元に広がっていた闇は、噴火の黒煙で厚く蓋をされた夜空だった。
真夜中だが、この噴煙の空で星が見えるわけではない。

その「降下用耐性ポッド」を、常備している[空挺部隊](#)の隊員たちは、「キラーシェイカー」と呼んでいた。

俗称の由来には、その[言葉から](#)連想されるような[ロマンチック](#)な要素はまったくなく、ただ単純に降下中の快適性には一切なんの配慮もされていない、というのがその理由だった。

ポッドの全面が両側に開くと、内部に満たされていた衝撃吸収用のエアが一気に外部に流れ出した。

防塵[マスク](#)に送り込まれる[酸素](#)がポッドのボンベ[から](#)外気に切り替わると、[フィルター](#)を通しても強烈な[火山](#)地帯特有の[硫黄](#)の[臭気](#)が鼻孔をついてくる。

それに、熱い。

とにかくポッド[から脱出](#)し、地上用装備をチェックしなければならない。

点呼。

上官の声が[ヘッドセット](#)から響いた。

地上に着地した七人の[名前](#)が読み上げられていく。

[最後](#)に[自分](#)の[名前](#)を呼ばれ、依子は即座に返答したが、上官は目ざとく付け加えた。

その[右手](#)を[治療](#)したまえ。止血[セロファン](#)で処置後、傷口の状態を[スキャン](#)して[データ](#)を[転送](#)しておくこと。

それぞれポッド[から脱出](#)し、装備をチェックしていた七人の隊員たちの動きが止まった。

上官[から](#)の指示音声は依子にのみ届いていただけだったが、皆、なにかしら[トラブル](#)の気配を感じたに違いない。

依子は舌打ちしたい気分だった。

[手袋](#)をはずした[右手](#)の甲には一本の赤い筋がついていた。そこ[から](#)どくどくと血が流れていた。

すばやく止血用[セロファン](#)を巻きつけながら依子は考えていた。

それにしても、ポッドの中でどうやって怪我をしたのだろうか？

[パラシュート](#)用の[操作レバー](#)にこすりつけてしまったのか。[しかし](#)[手袋](#)にはなんの[痕跡](#)もなかった。

そうになると、この傷は密閉された降下用の防護服の中でつけたことになる。

理解できない。

それに、降下中に一瞬[見当識](#)を失ったのがショックだった。

今思い返しても、[自分](#)がどこにいるのか、判断がつかない瞬間があった。

そんなことは今までに一度もなかったことだ。

「ヨリコ。」

今度は、地上からの高度2000kmからの声だ。アナライザ独特の合成音。

「君の署名でメッセージが記録されているが、確認するか？
発信先も君のポッドになっている。降下中に送られてきている。」

降下中に私が何か記録した？
その奇妙な報告を無視するわけにもいかなかった。

右足の太ももに張り付いたタッチパッドから、メッセージ転送の了解を伝える。
その動作を誤魔化すかのように、同時に止血セロファンからのデータも転送したが、いずれにしても上官にはすべて筒抜けだろう。

すぐにアナライザからメッセージは転送されてきた。

右腕のパネルに、その内容が表示されたが、ミミズがのたくったような記号にしか見えなかった。
。

ミミズの記号の下には、

「>当該言語が自然言語である可能性・・・」とあった。
候補言語：ヘブライ語 54%、ギリシャ語 44%、・・・
・希望翻訳言語を選択してください。

ヘブライ語の知識など自分には皆無だった。これは苦笑するしかない。

どうやら降下中に、勝手に自分の指が意味不明の言葉をタッチパッドで書きなぐっていた、ということだ。

これで、結局、自傷行為のような傷口とあわせて降下中のパニック障害かなにか、そんな解析が報告されるのだろうか。結論が出次第、作戦行動からは外され、やんわりと基地に送り返されるのかもしれない。

地上作戦行動に移る。

依子の[危惧](#)を無視するかのよう、上官の音が[ヘッドセット](#)に響いた。
それで、はじめて周囲を見渡した。

前方の視界全面を覆い尽くしている黒い山[から](#)は、血の筋のような[マグマ](#)が流れ出していた。
まるであれは[魔の山](#)のように見える。
火口[から](#)立ち上る噴煙は小康状態と[はいえ](#)、夜の闇よりもなお黒い。
[地獄](#)の火の山とはこんな風景に違いない。

依子は、[しかし](#)噴火前の美しい山の姿をかすかに覚えていた。
なおさらそれが、目の前[のもの](#)と同じ山とは見えなかった。

あれが本当に、あの[富士](#)の山なのか。

隊員たちは2列で隊列を組み、歩き出した。山を大きく迂回するように、誘導灯の明かりが前方には続いていった。

依子の右腕の[液晶](#)画面に[ヘブライ語もどきの翻訳](#)結果が表示されていた。

「[水晶](#)塔を見つける者を探せ。

知恵の木を飲みなさい。

その恐れる[葡萄](#)の[黄泉](#)を[封印](#)するのです」

依子（1）過去＋1

依子が襖を開けると、そこには、大きな三毛猫を両手に抱いた男の子が立っていた。

男の子も、猫も、目を丸くして血で染まった依子の右手に釘受けになった。

その背後から、まあ！と大きな声が響くと、声の主がバタバと階段を駆け上がってきた。
やはり叔母の知恵だった。

その手はどうしたの？
家中に響くような大きな声だ。

その背後からのいきなりの叔母の大声に驚いて猫が男との子の手からとびだしていった。

硬直した両腕の中からの脱出するために猫は男の子の顔をしこたま齧っていった。
痛ててててっ！、

リュウちゃん！、邪魔！、どいてらっしゃい！。

叔母は猫に齧られたままポカンと突っ立っている男の子を追い払うと、そこから先はあっと言う間に大騒動となった。

叔母の次に叔父の正志が顔を出し、従姉妹の幸恵が隣の部屋から駆けつけてきた。
めったに2階に上がろうともしない祖母の八重まで階段の下から顔を出した。

結局、依子は一言も説明ができないうちに、怪我をした右手の甲には、消毒液が塗られ、赤子
ンが塗られ、

指先から片腕全体が覆われるほどの嚴重な包帯で保護された上に、
丘の上の病院まで叔父の運転する軽トラックで送られることになった。

3人乗りの軽トラの運転席には付き添いの名目で従姉妹の幸恵が乗り込んできた。

あたしがついてるから大丈夫だよ、ヨリちゃん、
それにしても兄貴のやつ、あれだけくだらない道具は片付けておけ、

って言いつけたのにまったく、もう

従姉妹の幸恵としては、今東京に下宿している依子が寝泊りしている部屋の主である兄が今回の災難の全ての元凶である、と決めているらしかった。

依子としては、今頃は東京の予備校に通い浪人生活を送っている何も知らない従兄弟に同情するしかなかった。

それにしこたま猫のミィに顔を齧られた後、この騒動から蚊帳の外に追いやれていた幼いリュウくんにも騒動の間に声をかけられなかったことを後悔していた。

依子がタベ遅くに、この母の実家である矢島家についた時、矢島家の飼い猫のミィの顔を見たい、といったのを、まだ起きていた小学生の隆三は聞いていたに違いない。

それで朝一番に、三毛猫のミィを抱えて叔母よりも先に依子の寝泊りしている部屋を訪ねたのだろう。

けれど丘の上の病院に行く、というのも、実を言うとちょっとした楽しみがあった。

丘の上からは、勝沼町の葡萄畑が一望に見渡せた。

葡萄畑の緑の絨毯が周囲の山をきめ細かく覆い、その向こう側には甲府盆地が広がっていた。そして、それらを抱きかかえるように、背後には、頂にまだ雪を積んだ富士の山が見えた。

そのパノラマは、どのような景色よりも依子を虜にしていた。

丘の上の病院で、嚴重な包帯を解かれると、傷口は、しかしほとんど消えかかっていた。

腕に残った乾いた血痕を丁寧に拭くと、それで治療らしい治療もせずに診察は終わってしまった。

ただ、その怪我の様子を見た穏やかな笑顔で治療することで幸恵が太鼓判を押していた若い医師は、

もう一度明日に精密検査をしたい、と神妙な声で言った。

傷は心配ないが、どうも様子を変だ、傷口には、本当に、消毒薬と赤チンだけで治療したのですか？

医師は、叔父に尋ねた。

あと、念のためオロナインH軟膏を傷の周囲に塗りました！

と、聞かれもしない幸恵が胸をはって答えたが、

医師は、答えた幸恵に、期待する笑顔を見せることもなく、叔父に言った。

まるで、新しい皮膚が傷を覆っているように見えるのです。

本当にお嬢さんの傷は今朝つけたものなのですか？

まるで1ヶ月前に治療した傷口のように見える。

若い医師は、不思議なものを見るような、厳しい顔をくづさなかった。

依子（2）現在＋1

目白依子の顔は小さく、[ちょっと子供](#)のようなふくれたような頬をしていた。年齢は46歳だった。

[髪型](#)は、ほとんどの[場合ショート](#)ボブで、今まで髪の色を染めたこともなかったが髪には[白髪](#)らしきものはなかった。

目は[茶色](#)で、光が反射すると、たまに[緑色](#)に輝くことがあった。

口元には皺があり、そのせいで疲れているような顔にも見えたが、それを気にしたこともなかった。

[電話](#)が鳴った。

依子が受話器を耳につけると、[電話](#)の向こうの声が尋ねた。

[白石探偵事務所](#)の目白依子様でいらっしゃいますか？

そうです、と依子は答えた。

依子様は、[・・・](#)つまり、こちらの依子様のことですが。

ひと呼吸間があいた。

さきほど、お亡くなりになりました。[電話](#)はそれだけ告げると一方的に切れた。

三日前のことだった。[場所](#)は銀座で、午後2時だった。その日は朝[から](#)小雨が降っていた。

地下鉄日比谷線の銀座駅出口[から](#)、男女の2連れが出てきた。

男のほうは紺の背広を着ており、[身長](#)は160cm程度の小柄な体格だった。

男は少し背をかがめて歩く癖があった。

女は、やや男[から](#)遅れて後ろを歩いていたので、男の部下のようにも見えたが、2人の年齢はほぼ同じくらいだった。

女は目白依子だった。男は依子の同僚で、[名前](#)を持倉と言った。

傘もささずに歩いていたが、この2人連れが周囲の関心を引くことはなかった。

2人は、やがて三越デパートの裏通りにある8階建てのオフィスビルに入って行った。
そしてそのビルの5階で狭いエレベータを降りると、ハンカチで雨に濡れた衣類と顔をぬぐった。

その場で1人の黒い背広を着た年配の男が待っていた。

高間と言います、とそれだけ名乗ると、高間は、2人を、その階のあるドアの前まで案内した。

そこで脇にどき、2人に道を開けた。

持倉が、ドアを開けようと、先に進み出ると、高間は軽く片手をあげて彼の行く手を制した。

申し訳ありませんが、中には依子様お一人だけに来てほしいということです。

持倉の眉間に戸惑うような皺がよった。

そんな、と言う彼のアクセントには少し関西なまりがあった。

ここで待っていて。

依子が言い、持倉と入れ替わって、ドアを開けた。依子は中に入った。

持倉は高間とともにドアの前に残された。

依子が入っていくと、部屋の窓にはカーテンがかかっており、真っ暗になっていた。

わずかに非常灯の明かりで部屋の大きさを測るしかになった。

依子の手が自然にドアの横のスイッチに手が伸びたが、

明かりはつけないで下さい。

という女の声がした。

まるで放送用のマイクを通したような声だった。

つづけて、カチンという機械音がした。

ぼんやりと四角い白い空間が目の前に開いた。

プロジェクターからの投影画面だった。

目の前には、50 [インチ](#)ほどの[スクリーン](#)があった。画面の中に、一人の[女性](#)が座っていた。その[女性](#)は、頭の上からつま先まで、真っ白に見えた。頭髪は剃られたのか白い[頭巾](#)がかぶされていた。

[衣服](#)は[白衣](#)のようだ。
ひどく痩せていた。

大きな目の周りだけ[けが](#)、赤く、熱っぽく腫れあがっていた。
目は霞がかかったような鈍い光[しか](#)反射しないように見えた。
[プロジェクター](#)の中の部屋は、病室のように見えた。

[はじめまして](#)。依子さん。
わたしをご存知ですか。

知っている、と依子は答えた。

[ねじ](#)巻依子さん、ですね。[映画](#)に出てらっしゃる。何本かは見たこともあり[ます](#)。

[プロジェクター](#)の中の[女性](#)が、それを聞いてうなずいた。

こんな形でごめんなさい。でも、直接お会いすることはできないのです。
この[病気](#)のせいです。

画面の中の依子はそう言うと、少しうなだれた。

呼吸が乱れていた。
しばらく呼吸が整うまで[時間](#)がかかった。

癌なのです。
もう長くはありません。

その話は依子も知っていた。[週刊誌](#)の記事や[TV](#)で。もう末期のはずだった。

お願いがあり[ます](#)。調査の依頼です。
画面の中心がわずかにずれた。

[カメラ](#)がすこし動いたようだった。画面は傾いたまま[映像](#)を流していた。

私の、[最初の映画](#)をとり返してほしいの。

盗まれてしまったの。

また、少しうなだれた。呼吸が乱れていた。

振り絞るように声を出した。

私が死んだら、調査をはじめて下さい。

私が死んで、この[映画](#)が。

この[世界](#)がまだ続いていたら。

調査をはじめて。

その三日後に、[彼女](#)は死んだ。

依子は、その知らせを受けた受話器を置くと[洗面所](#)に入った。

[洗面所](#)で鏡をのぞくと、疲れたような[自分](#)の顔が映っていた。

[世界](#)はまだ続いていた。

依子（3）未来＋1

吹き上げられた噴煙が火山雷を呼び、その光は富士の裾野の山肌から地上に平行に走っていた。まるで光る強大な蛇が裾野のあちこしでのた打ち回っているようだ。

なだらかな裾野のせいで火口からの溶岩は大きな赤い海のように広がっていたが、その流れの速度は遅いので、溶岩が溜り、火砕流を引き起こすよりはずっとましなのだった。

7人の行軍は、誘導灯が切れた後もしばらく続いたが、やがで目的地である建物が見えてきた。

陸上自衛隊駒門駐屯地は、火山灰に覆われて、彼ら前にはまるで掘り起こされたばかりの遺跡のように見えた。

遠目からはどこからどこまでが敷地内なのかも判断できなかった。

古い学校のような庁舎の背後に建てられた、ドーム型の巨大な施設は、そのままの形を保っているように見えた。

先頭を歩いていた副隊長が足をとめた。

ブレインストームを装着せよ。

呼吸具を誤って外して灰を吸い込まないように気をつける。

上官の声に従って、七人の隊員たちは背負った装備から布製の帽子のようなものを取り出した。

ヘッドセットを外して頭に被ると、その上からまたヘッドセットをつける。

最後に錠剤を取り出すと、呼吸具をわづかにずらして口に含んだ。

錠剤は舌の上で炭酸の泡のようにはじけた。

依子は、後頭部からじんわりと温くなるような感覚を覚えた。

愉快的感覚ではなかったが、何度も経験した感覚だったので、どこかほっとしている自分が妙だった。

これだけ非日常的な風景の中にいると、ブレインストームが小雨のように感じるのだ。
暗証番号を入力してください、と、これはヘッドセットからのアナライザからの声だった。

依子はいつものように頭の中に白いノートを想像した。

その想像上のノートに、8桁の番号を頭の中で描きこむ。
「2023、04・・・」

暗証番号を確認中です。ヘッドセットを通した声の後、

頭の中に、いつもの声が響いた。

「おはよう、依子。 グレープシティにようこそ」

アナライザの声が、ぐっと紳士的に頭の中に響いた。
それは奇妙な符牒だったが、デフォルト設定をを変更していないためだ。

つづいて、ざわざわと七人の隊員たちの声が頭の中に響いてきた。
それらの声は、実物の声の周波数とほとんど同じように調整されている。

最後に

「静かにしろ」と上官の声で、頭の中が静かになった。

「おしゃべりのための装備ではない」

頭に張り付いた超伝導量子干渉素子が、脳から発生する磁界を検出し、ポッドと人工衛星を經由して、ペンタゴンの地下5階にある巨大な集合サーバ（グレープシティ）に解析させた結果成立している脳内対話だった。

確かに、おしゃべりのための装備ではなかった。

依子（1）過去＋2

若先生、妙だったね。笑わないで。幸恵は、なんだか不満そうに口を尖らせていた。

丘の上の病院の若先生は、依子の傷口を見て、からかわれたと思ったのかもしれない。

幸恵ちゃん、ごめんね。と言うと、
なんでえ？と幸恵はことさらに大きな声で笑った。

丘の上の病院では、診察が済み、手の怪我也大丈夫かと思うと、さっさと車で叔父を先に帰らせて、幸恵と依子は二人で並んで坂を下っていた。まだ5月だったが初夏のようば日差しが坂に降りそそいでいた。

葡萄畑の周りに作られた水路を流れる水の音が、自然と二人の靴音とリズムをきざむ。

どこからか笛と太鼓の音がしていた。
ああ、今日は武田神社の神輿祭りだったんだ。

ねえ、ヨリちゃん、ちょっと寄ってこよう。

葡萄の季節にはまだ早かったが、この時期には桃の花がピンク色の雲のように神社を囲んでいた。

坂道から脇に入った神社への道には、今夜のための出店の準備で、リアカーや軽自自動車が行きかい,けっこうな人ばかりができていた。

通りに面した家の軒下では、法被をはおった男たちが「祭」の文字の入った提灯をつり下げる作業をしている。

大きな農家の門には、縁台が設けられ、その上に旅芸人の支度をしたチンドン屋が休んで煙草を吸ってた。

長い石段を上った先の境内では、山車の中で子供たちが太鼓の稽古をしていた。

幸恵と依子は足を止めることもなく、それらを眺めながら境内を一周していたが、やがて幸恵がひよこ売りの店の前で足をとめた。店はまだ準備の最中だったが、段ボール箱で作られた巣箱は開かれ、黄色や青い色に塗られたひよこたちがピヨピヨとさざめきながら体を寄せ合っていた。

ふーん、と頬笑みながら幸恵が覗きこむ。

つられて依子もその後ろから幸恵の肩越しに覗きこむと、一斉にひよこたちがこちらを向いた。

何十匹のひよこが上を向いて、興奮したように口を開ける姿は壮観だった。
幸恵がそのひよこたちの視線の先をたどって振り返ると、依子の笑顔があった。

ヨリちゃんて、凄い。

と思わず幸恵が言葉を漏らした。

まるで親鳥だね。

依子はひよこたちの前に幸恵と並んで座った。

そうすると今度はひよこたちの視線が一斉に依子を追いかけた。

そういえば、昔買った亀どうなったの？
こんなに大きくなったでしょ？
と、幸恵が大げさに手を広げた。

大きくなりすぎて、近所の池に放しちゃった。と依子は言った。

へえ。金魚も凄かったもんねえ。まるで鯛みたいになってたもんねえ。そうかそうか。

二人が坂に戻ると、坂の中腹にある原っぱに、大きなテントが張られる準備がされていた。

あれ、なにかしらね。と依子が指差した。お祭りでサーカスかしらね。
ああ、あれ、ね。
と幸恵は以外にそっけなかった。

栗本の出し物だよ。

テントの前には、確かに「栗本興業」という看板が見えた。

大きな丸いドーム型に広がったテントの上には、今、大きな目玉のような看板が釣り上げられて

いた。

なにあれ。気持ち悪い。不気味。と幸恵がつぶやいた。

栗本のやることはすかん。

幸恵はすたすたと先を急いだ。

依子はその剣幕にわけもきけず、あわててあとを追った。

ふと振り返ると、[テント](#)の頂上が開き、一人の男の影が立ち上がったかのように見えた。

あんな上に人がいる。

逆光で影しか見えなかった。

その影は丘の下に広がる街を見下ろしているように見えた。

そして、ふと依子のほうを見たような気がした。

「[グレープ](#)シティへようこそ」 と、依子の頭の中で声がした。

依子（2）現在＋2

[白石探偵事務所](#)の所長は[白石義男](#)と言う[名前](#)だった。55歳だった。

[大学時代から](#)ずっと[東京](#)に住んだが、[関西出身](#)であり今でも頑固に[関西弁](#)で喋った。

体は細身で、その目も細く、いつも黒淵の[眼鏡](#)を掛け、喋る時にはさらに目を細めたので、何を考えているのか読み取れない。額が大きく張り出すほど禿げていたが、薄い軟[かい](#)頭髪が馬の[尻尾](#)のように頭に残っていた。

持倉と二人で[関西弁](#)で喋ると、まるで掛け合い漫才のような[調子](#)になったが、本人たちはしごく真面目な様子だった。

[白石](#)は、目を閉じて腕を組み、目白依子と持倉を前に事務所のテーブルに座っていた。

依子が[メモ](#)を広げた。

持倉が報告をはじめた。

さて、盗まれた「[ねじ巻依子](#)」の[最初](#)の主演[映画](#)は、

首都圏[タウン情報誌](#)とATG、日本[アートシアターギルド](#)との共同[出資](#)で[製作](#)されています。[1982年製作](#)。映画の題名「[ねじ巻依子の冒険](#)」。

これは、当時、まだ[高校生](#)だった高間真一が[8ミリ](#)で作った[映画](#)でしたが、[情報誌](#)で一般[公募](#)された[学生映画](#)グランプリを受賞。

その後、35 [ミリ](#)で[劇場版](#)として再[映画化](#)された[もの](#)です。[監督](#)は同じ高間真一。[学生監督](#)やね。

この当時、こういうのが流行ったんですね。

[スピルバーグ](#)みたいに日本でも若い奴に[映画](#)作らしたろ、と。

[独立系製作会社](#)が1000万程度の低予算で[映画](#)を[製作](#)するという形式です。

主演の、[本名](#)（当時）[川本紀子](#)は、[映画](#)の中で、「[ねじ巻依子](#)」という[名前](#)の[少女](#)、というか「[人形](#)」を演じています。

[映画](#)の[ストーリー](#)も調べました。

ストーリーです。

捨てられた「人形」の「ねじ巻」が、魔王によって命を受ける。

彼女が人間になるためには、24 時間以内に、彼女の身代わりに人形になってくれる人間をさがさなければならない。

だが当然見つからない。

おまけに「ねじ巻」の過去を知る、「大富豪の鼠」がなにかと彼女の邪魔をする。

彼女は、最後に、森に住む盲目の孤独な老人に会います。

この老人はすっかり「ねじ巻」の身上に同情し、先の短い人生を彼女のために捧げる覚悟を決める。

しかし最後の1 時間に、別れた娘、実はこれは鼠の手下なのですが、「依子」に会った老人は、わが身を捧げる決心が鈍る。

「ねじ巻」は、つい、地下の国へ娘「依子」をさらってしまう。

老人は、娘の命と引き換えに人形になるため滝から飛び込む。

「ねじ巻」は人間になるチャンスが与えられるが、後悔し時間を戻すんですな。

ここで、「ねじ巻き」とは時間を戻す能力の意味であることが分かる。

老人は生き返り、地下から娘「依子」を連れて無事に助かる。

「ねじ巻き」はあきらめて去ろうとする。

しかし娘（鼠の手先）は老人を食べようとする。

でも実は、この老人は魔王だった。

大富豪の「鼠」は、化石に変えられる。

「ねじ巻」が森を出ると、人間「ねじ巻依子」になり、彼女の前には葡萄畑が広がっていた。

まあ、ざっとこんな感じの。ファンタジーですわな。ところが、です。

映画に出てくる悪役の鼠が実物の栗本グループ総裁の栗本米蔵をモデルにしている、ということで名誉棄損で訴えられる。

栗本米蔵ですが、まあ山梨の勝沼町を拠点とする地方の名士みたいな人物ですな。

大手酒造メーカに葡萄の農場を売りさばいて財をなし、この地方では名を知られた人物らしい。

当時自民党幹部だった同県出身の国会議員とのパイプも有名なようです。

映画製作スタッフはまるっきりそちら方面に疎くて、ちいいとも気付かなかった、という話です。

「大富豪の鼠」の人間名ちゅうんですか、それもズバリ、そのまま「栗本米蔵」、

その住んでる大富豪の屋敷も「栗本米蔵」[のもの](#)に、そっくりでセットで作ったらしい。

[裁判](#)の結果、[製作会社側](#)が敗訴。

[一般公開](#)は禁止。

[監督](#)の高間はこれ1本以降、作品は発表していません。

[しかし](#)、主演女優[ねじ](#)巻依子のほうは、芸名を[最初](#)の主演[映画](#)の役名の「[ねじ](#)巻依子」のまま、[芸能活動](#)を[継続](#)。

かえって[名前](#)を売る宣伝になった訳や。

[マイナー](#)系の[映画](#)に主演で、正式公開されていたら逆にその後にあ[まり](#)売れへんかったかも[わか](#)
[らん](#)ですね。

[わからん](#)もんや。

その後、[映画](#)の[製作会社](#)は[1992年](#)に活動を停止。

この時に、[ねじ](#)巻依子は[映画](#)の[フィルム](#)を買い上げて、自宅に保管していました。

同じ年に、[映画監督](#)の高間真一と[結婚](#)して[ます](#)。

この買い取った[フィルム](#)がいつの間にやら盗まれていた、という訳ですわ。

あの高間って男、元[映画監督](#)の高間真一やったんか。てっきり今時[召使い](#)かい、と思うたのになあ。よっぽど苦労したんか。まだ私らと変わらん年なのに、いやに老けこんでましたね。妙な[面談](#)でしたな。

芝居がかって、[サンセット](#)大通りみたいな。

今朝、高間[から](#)[調査費用](#)の振り込みがありました。

調査ははじめ[ます](#)か？

[白石](#)は、依子の[メモ](#)を[ふい](#)に覗きこんだ。

そこには、[ねじ](#)巻依子の略歴が[メモ](#)されていた。

高間[から](#)指定された調査条件は、3日[単位](#)で調査報告のみ、だった。

もちろん[成功報酬](#)も提示されている。

どうする？

やり**ます**、と目白依子は短く答えた。

わかった。ええやろ。

「**ねじ**巻依子」

本名 高間**紀子**（旧姓：**川本**）

生年月日 **1965年6月7日**

本籍地 日本・**東京都昭島市宮沢町**

現住所 **東京都江東区有明**

血液型 A

職業 女優

東京都立拝島東高等学校卒

山梨県立都留文化大学中退

夫は**映画監督**：高間真一。

子供はなし。

1982年 **映画**「**ねじ**巻依子の**冒険**」に主演(17歳)

監督 高間真一

映画「**ねじ**巻依子の**冒険**」**名誉棄損**で上映禁止。

以降、芸名を「**ねじ**巻依子」として活動。

1992年 **フィルム**を入手。

高間真一と**結婚**

1998年 癌が見付き、**治療**。

芸能活動継続。

2003年 **から治療**に専念

2005年 **芸能活動**復帰

2009年 吐血し**入院**

2010年 癌が再発、**転移**

2012年 **4月20日**死亡。47歳没。

その日の夜、

目白依子のマンションの1階には、[コンビニ](#)があり、[彼女](#)はその袋を抱えて、4Fで[エレベーター](#)を降りた。

[自分](#)の部屋のドアを開けると、1LDKの暗い部屋の中で、一番奥にある[電話](#)の[留守録](#)のランプだけが灯っていた。

部屋の[電気](#)をつけ、[コンビニ](#)の袋を[キッチン](#)に置くと、上着を脱ぎながら[留守録](#)を押す。

通信販売の勧誘と、[電話会社](#)からの[回線](#)切替の案内のみで、[留守録](#)は切れた。

ポケットから[携帯](#)を取り出し、[電話](#)の横の充電器に収めた。

[時計](#)を見ると、10時を回っていた。窓の[カーテン](#)を開け、暗く街灯が灯るだけの下の通りを一度見下ろすと、また閉めた。

[バスルーム](#)に行き、服をすべて脱ぎ、シャワーを浴びた。

やがて髪を拭きながら、[ガウン](#)を着て[バスルーム](#)から出てきた。

そのまま台所に行き、[コンビニ](#)の袋を開けると、中から4分の1に[カット](#)された西瓜が出てきた。

包丁を取り出し、西瓜を2つに切り、半分は[ラップ](#)をかけて[冷蔵庫](#)に押し込む。

残った西瓜をさらに2つに切り、その半分を3つに細かく切り分けると、[ガラス](#)の容器に入れて台所のテーブルに置いた。

1つずつ丁寧に食べていった。

[電話](#)を見た。

[電話](#)と[携帯電話](#)は並んで依子の[視線](#)の先で[沈黙](#)していた。

3つの西瓜をすべて食べきってしまうと、髪を乾かすために寝室に移動した。

髪が乾くと、下着をつけ、スウェットの上下を身につけた。

台所には、先ほど切り分けた西瓜の半分が、まな板の上に残っていた。

残った西瓜を、今度は細かく[ブロック](#)型に切り分けた。

それをまた先ほどの[ガラス](#)容器の中に入れた。

TVの前に移動して、TVをつけた。

[ニュース](#)が流れていた。

[ブロック](#)型の細かい西瓜を1つずつ口に入れながらしばらくTVを見ていた。

やがて、12時近くなると、部屋の電気を消して、寝室に移動した。

寝室とのドアは開けておいた。

ドアを開けておくと、ベッドの中からは、リビングの2つならんだ電話機が見えた。

寝室の明かりをつけたままベットに横になった。

リビングの電話と携帯電話は、並んで、依子の視線の先で沈黙していた。

依子は、ベッドに横になったまま、ふと、高間と言います、と低い声を出した。低い声ではあるが、高間の声には似ていなかった。

申し訳ありませんが、中には依子様お一人だけに来てほしいということです。と今度は言った。

やはり少しも高間の声には似ていなかった。

なかなか眠れなかった。

結局、朝まで眠れなかった。

依子（3）未来＋2

依子たちの前に現れた陸上[自衛隊騎門駐屯地](#)は、まるで、[吹雪](#)の中の建物のようだった。

だが雪とは違い[火山灰](#)は溶けて流れることはしない。建屋の[屋根](#)に積もった灰は雨を吸い込むと石膏のようにすべて[もの](#)を包んだまま固[まり](#)はじめ、いづれ中身を押しつぶすことになるだろう。

[駐屯地](#)の門らしき[場所](#)に近寄ると、[黄色いフォグランプ](#)が灯り、その明かりが依子達をとらえた。

七人の隊員達は一瞬緊張したが、やがて彼らの光の中に基地の門側[から軍服](#)の3人が歩み寄ってきた。

「そのまま待機」頭の中に声が響き、同時に上官が1歩進むと歩み寄ってきた3名が[敬礼](#)をする。

中の一人が進みでてきた。

国際活動隊の[上村](#)です。代表でお迎えに参りました。[マスク](#)を外して地声で名乗った。

[アメリカ海兵隊のマギー・フィッツジェラルド](#)です。上官が返礼した。

[マギー](#)中尉。報告は受けております。こちらにどうぞ。

この状況下で代表者を迎えるに出すのは、いかにも[自衛隊](#)らしい、と依子は思った。

依子は彼らの後を一步一步つつすみながら、なつかしい建物を見返した。この[駐屯地](#)は訓練で一度訪れたことがあった。その頃の[記憶](#)と[比較](#)すると、ずいぶん小さく感じた。

依子は、少しの間、[自分](#)個人の回想に浸るために、頭の中の[ノート](#)は閉じ、[ラジオ](#)だけをつけたままにした。

こんな風に頭の中で小物を[操作](#)するような[イメージ](#)を描くことで、依子は[グレープシティ](#)とつながっている。

この[イメージ](#)の作り方は人それぞれだ。その時の状況にもよっても変えることが出来た。

装着している[ハードウェア](#)の[ヘッドセット](#)を使っている[イメージ](#)を思い描く時もあれば、[昔ながら](#)のPC用[キーボード](#)と[モニタ](#)を登場させる時もある。

それらの[インターフェース](#)を[脳内](#)で[表現](#)する小道具が、皆、どこか古めかしい小道具が選ばれるのは、脳と[感覚器官](#)がいわば[アナログ回路](#)だからだろうか。

[しか](#)しなによりも素晴らしいのは、[視覚情報](#)も[符号](#)化して[転送](#)できることだった。
ペンタゴンの[サーバ](#)に蓄えられた[データベース](#)で、[アクセス](#)が許可された範囲ではあるが、見る物すべてを、瞬時に[自動](#)解説してくれる頭をもつことができた。

依子の日本での生き立ちは戦争の[記憶](#)とともにあった。

北朝鮮[崩壊](#)に伴う朝鮮半島の動乱が起きたのは依子が[中学生](#)の時だった。[多国籍軍](#)が乗り込み3日間で終結した戦争と[はいえ](#)、それが戦争[である](#)ことに変わりはない。

依子はその戦争で海上保安庁に勤めていた父を亡くした。

その後、[東京](#)で働く母と離れ、山梨の勝沼町で、祖母と2人だけで生活した。

父の恩給もあり、[暮らし](#)は決して苦しくはなかったが、か細い祖母との生活の中で、依子は[自然](#)と「[これから](#)は[自分](#)の身は[自分](#)で守らなければならない」という思いにとらわれていった。依子の成長とともに、その[観念](#)も成長した。

海を見れなくなったのも寂[しか](#)った。[しかし](#)、春[から](#)夏にかけての緑の[平野](#)は、祖母と二人[暮らし](#)となった依子を何度も慰めてくれた。

それにあの素晴らしい緑の絨毯のような[葡萄畑](#)。

山梨で過ごした高校[時代](#)には戦争以来盛んになった武道部に入った。

[大学](#)進学と同時に[東京](#)に再び出たが、その時に祖母が亡くなり、祖母と過ごした山梨の家は引き払った。

[大学](#)では、生体[電子工学](#)を学んだ。在学中に都内の武道道場に入門し、武道の[修行](#)もつづけた。

半島では、戦争の終結に伴う大量の難民[流出](#)問題と、[戦後](#)の半島統一に向けた、韓国、中国、ロシア、[アメリカ](#)、そして日本の思惑が[交錯](#)して燻り続けていた。[特に](#)日本はその燻りが小さく破裂する舞台となった。

日本[国内](#)では、半島の[権利](#)を少しでも得ようと動く大国大使館への[テロ](#)が頻発した。

武道道場の先輩に[自衛隊](#)への入隊を勧められた時、依子は、はじめて[自分](#)が父親と同じ道を進んでいることに気付いた。[卒業](#)後、陸上[自衛隊](#)に幹部候補生として入隊した。

[普通科](#)で部隊勤務し、レンジャー[資格](#)を得た。

そして同じ[普通科](#)の男といつか[結婚](#)の[約束](#)をした。

[しかし](#)、特殊[情報](#)部隊創設のため、[グリーンベレー](#)に一年間[留学](#)してみないか、という話を上官[から](#)聞かされた時には、あっさりと日本での[結婚生活](#)を捨て、志願したのだった。

「生体の脳[から](#)直接[情報](#)通信できる[機能](#)を備えた特殊[情報機器](#)を装備した部隊。」

その部隊が「ブレイン[ストーム](#)[情報](#)部隊」だった。

その1年間の留学が残すところ1か月となった時、日本で、東海地震発生の新ニュースを聞いた。その時、依子はフィリピンの米軍基地にいた。

震源地は駿河沖、駿河トラフと呼ばれる細長い溝状のプレート境界。マグニチュード8。

地震の発生により、死者は約1万5000人、10メートルを超える津波で約50万棟の住宅が全壊。

経済被害は約81兆円。

予想されて置いた連動型ではなかったこと、国内の原子力発電所のほぼ半数が国内テロを警戒して停止しており、関東地方での設備が、再構築されてる最中のために停止していたのは不幸中の幸いだった。

しかし、東京から名古屋での太平洋側では、ほぼ全域交通機能は麻痺状態に陥った。

依子は日本の母とは連絡が取れなかった。

東京での首都機能は麻痺し、震災から1週間後には、大阪に日本国臨時政府が作られることになった。

東北地方に首都機能を移転する計画もたてられたが、かつての東北大震災の記憶がそれを阻んだ。

この臨時政府設立のために、政治家や官僚の大移動は日本海側の交通機関を通して行われた。

半島戦争終結後のこの厄災に、国際世論は同情したが、その間も太平洋側では大量の被災者たちが避難生活を強いられていた。

おまけに、この首都機能移転の大移動の最中、日本政府公用車が一人の少年をはねるという事故が起こった。

この少年は日本海側にあった半島からの戦争難民キャンプの少年だった。

キャンプでは暴動がおり、それを収集する術も見つからないうちに、防衛大臣の難民への差別発言問題が起こった。

世論は、やがて日本海側に続く政府要人の黒い公用車の列を「鼠の大移動」と形容する批判論調に変わっていった。

この東海地震から半月後、ようやく大阪での臨時政府が形を整えた頃、唐突に、富士の噴火活動は始まった。

地震後、50%程度の滑走路をなんとか確保できていた東京羽田国際空港、及び成田空港も、この噴火の影響で全面的に使用不能となり、噴火が頻発するうちに、結局、関東平野上空での民間機の飛行は不可能になっていった。

震災で瓦礫の山となった東京都内には、10cm以上の火山灰が降り注いだ。

震災の復旧どころではなかった。こうして、大阪臨時政府は、富士の噴火によって、関東地方との通常の連絡手段を失っていった。

富士を境に、日本列島が南北に分断されていた。

防衛庁幹部が、臨時政府は関西にあり、防衛大臣直轄の自衛隊部隊である中央即応集団はいづれも関東に集中しており、空自と米軍による共同統合運用調整所も、依然、東京の米軍横田基地にあること気づいたのは、こうした事態が明らかになった後のことだった。

ロシア軍が災害派遣を名目に、日本国臨時政府の要請もなく北海道に向けて南下を始めた、というあまり根拠のない情報が関西地区で広まるにつれ、結局、日本国臨時政府は全面的に米軍に支援を要請するほかなかった。

もう一度北上する気力も体力も、日本政府には残されていなかった。

一刻も早く、富士周辺の中継基地機能を回復し列島の通信機能分断状況を回復しなければならない。

こうして、依子たちは、フィリピンの米軍基地から空母で日本に向かった。

駐屯地司令勤務隊舎に向かう道には、ビニール製のトンネル型屋外通路が臨時に設営されていて、そこに入ると依子たちは防護用のマスクを顔からは外すことができた。

ストームの隊員たちが皆防護装備を外して、顔を出すと、案内役の自衛官達ははちょっと驚いたような顔をした。

隊長のマギー・フィッツジェラルド中尉をはじめとして、隊員7人のうち6名が女性だったからだ。

副隊長のイラン・ラーモン少尉は、唯一人の男性だった。しかし彼は装備の技術担当が専門であり、ストームはつけていない。

脳内対話能力は女性のほうが圧倒的に優秀な能力を発揮していた。この特徴は研究段階から明らかだった。その原因についてはいろいろな説があった。

女性のほうが一般的に脳幹が発達しているため、というのが有力だったが、ともかく女性隊員を中心に実用化がすすめられ、実戦にも配備されていった。

「ストームはそのままにしておけ」マギー中尉の命令が（脳内に）下った。

隊員達の間からは、せっかくの室内で、このやっかいな頭のストッキングをこのままつけているのかとため息が漏れた。

古い旧建屋に入ると、廊下には明かりがついていた。

非常時にそなえて明かりを落として節電しています、足元に気をつけて下さい。

案内をする上村の言葉に、

「今が非常時だという認識はないのか？」

とちょっと皮肉まじりに（脳内に）サラ隊員が呟いた。

依子は思わず足を止めた。

これは彼女の悪い癖だと知りながらも、サラを振り返った。

その瞬間、「だまれ、サラ。非常時は戦闘時の意味だ」と、すかさずマギーからの叱咤が隊員達全員に飛んだ。

サラはちょっと肩をすくめてみせた。

あえて全員に伝えたのは私への配慮もあるのかと依子はちょっと嬉しくなったが、マギーのほうは上村を追いこさんばかりの早足で先に進んでいた。

やがて、旧建屋を抜けると、ドーム型の新建屋への入り口が見えてきた。

[駐屯地](#)での[ストーム](#)隊員達の[最初の仕事](#)は、[わず](#)か数秒で終わった。

[ドーム](#)型新建屋に入ると、中央に設置されている通信[機械](#)室に行き、その中に並んだ[サーバ](#)の1台へラーモン少尉がメモリカードを[差し](#)込んだ。
それで終わりだった。

やがて[サーバ](#)用[モニタ](#)に[自動リセットメッセージ](#)が出て、[再起動](#)されると、これで陸上[自衛隊](#)[駒門駐屯地](#)の全指令・通信[機能](#)はすべて米軍の管制下に置かれたのだった。

[もっとも](#)、[自衛隊](#)の[マイクロ回線](#)は[レダ](#)毎[破壊](#)されており、専門技師も修理[部品](#)も調達できない現状では、独自の復旧は[絶望](#)的だった。[航空機](#)からの非常[無線](#)か、それこそ手旗[信号](#)でも使う他は手はなかった。

[しかし](#)これで米軍の管制下に置くことで、ポッド経由の米軍[軍事衛星](#)で通信が可能になるはずだった。

[サーバ](#)の[ハードウェア](#)が[更新](#)されているな。

作業中にラーモンが呟いた。
それは作業を補佐していた依子もきづいていた。

本体の[メーカー](#)の[マーク](#)が、おなじみのスリー[ダイヤマーク](#)ではなかった。

「 π 」のような[記号](#)がついている。
依子は[ちょっと](#)息を飲んだ。

それは、「K」を右90度回転したロゴ[マーク](#)だった。

そして依子が高校[時代](#)に過ごした[場所](#)で、よく目にした[マーク](#)だった。

依子の頭にその[メーカー](#)の説明が響いた。

=====

「栗本重工[株式会社](#)

主力[製品](#)は、船舶・[エネルギー](#)関連[機器](#)・[産業用ロボット](#)・生体[兵器](#)製造

[1964年](#)（[昭和39年](#)）- 栗本米蔵が前身である栗本[産業](#)を山梨県甲府市に創設

[1974年](#)（[昭和49年](#)）- 工作[機械用ロボット](#)製造部門を中心に、栗本重工[株式会社](#)として正式[独立](#)。
山梨県忍野村に[本社工場](#)を[設立](#)

[1986年](#)（[昭和61年](#)）- 基盤[技術研究所](#)設立

[2003年](#)（[平成15年](#)）- [本社](#)を[東京](#)・品川に[移転](#)・・・」

=====

依子達が、中2階の緊急会議室に上ると、狭い部屋には先ほどの上村はじめ、駐屯地に残っていた幹部がそろっていた。

国際活動隊、第1機甲隊、第1戦車大隊、第1高射特科大隊・・・それぞれの大隊代表らしい。

駐屯地の全隊員は、総勢800名を超える数だったが、今残っているのは、その3分の1以下の250名程度だ。

そのほとんどが東海地震の災害派遣で出動していたためだった。

陸の孤島となった駐屯地だったが、富士噴火による人的被害はわずか10名程度の重軽傷者のみで済んでいた。

ここは戦闘状態を前提にした基地なのだ。それは当たり前と言えは当たり前だったが。

やがて、緊急会議室の大型スクリーンに人物が投影された。

背後には日の丸が掲げられており、机に座って落ち着いた面持ちで話し始めた。

東部方面総監、雨宮陸将。

「雨宮です。無事でなによりだった」

さすがに、この瞬間には、会議室にもわずかなどよめきが起こった。

画面の画像は大きく乱れていた。

これは、依子たちのストーム用回線を使っての衛星放送だった。

米軍側専用回線だ。

噴火が激しくなると電磁波も乱れた。

「上村隊長、御苦労だった。他の皆も」

上村は思わず敬礼をしていた。

「そちらの様子は、マギー中尉からも聞いた。この状況下で、ここまで皆が冷静に対処されたことを誇りに思う」

「だが現状はまだ我が国は瀬戸際の状態にあるのだ。

このような状況となったことを「よし」としない者もいるだろうが、今は手を差し伸べてくれる友人たちに素直に従うべきなのだ。

これはわが隊、総司令部の総意である。

我々がこの状況で潰れてしまえば、この国の危機に立ち向かう者がいなくなってしまうことを忘れるな。

この災害で困頓し、いたずらに時を稼ぐな。

常に国際社会が、我が国のこのような状況を注目していることを頭に置いて行動しなければならない。」

少し間をおいた。

「まだ、これから先に、いくらでも諸君の全力をあすかる機会があるだろう。くれぐれも冷静に対処してほしい」

画面の雨宮は立ち上がり、敬礼した。

「では、今回の作戦の説明に移ります」

画面が切り替わった。眼鏡をかけた若い男が現れた。

「横田の共同運用から、日下です、よろしく。マギー中尉、ご苦労様です」

眼鏡をずり上げながらせかせかを喋る。

日下国際活動隊隊長。

「オタク」と（脳内）でサラが言った。
これには依子もあえて何も反応しなかった。

「作戦は先の航空機無線回線で伝えた通りです。
大まかな変更はありません。
念のため確認します。」

画面に日本地図が出る。

東京から大阪までの地域が拡大される。

「えー、まず太平洋側の状況です。」

画面の日本地図で、下側の海岸線が黄色く表示された。

東海地方は余震もまだ続いてます。避難民の状況も、ひどい。

仮設住宅建設の目途さえついてない状況です。
道路は復旧している部分もありますが、特に東名高速で流された車の処理に手を焼いています。
やっと人が通れる程度の復旧道路が何箇所かまだあります。

現時点で、すでに避難所生活で疲れ切って、地元自治体、消防庁、民間ではとても手が回りません。

今朝、500時、日の出を待って、米軍空母より海兵隊1個中隊が小田原から上陸します。

東海側で待機している自衛隊第一師団の災害派遣隊と合流し、関西方面との通信設備設営のための行動です。

しかし設備用電源そのものの確保もおぼつかない状況です。

これから人海戦術ですが、通信設備作業はかなり難航しそうです。

「変わって日本海側の状況です。」

今度は、画面の日本地図で、上側の海岸線が黄色く表示された。

現在、難民キャンプ、というか、もはや難民村ですな。こちらの暴動はほぼ制圧されています。

ただ、1週間前からまた隊設営地への放火事件が頻発しています。

警察組織もかなりの被害を受けています。

とにかく日本海側は、難民の暴動問題解決に力を入れることが一番となっていますが、下手にこちらが動くと、かえって拡散するばかりの状況です。

海の向こうからも、北からも、いろいろ注意すべき情報が入っています。

なので、通信設備の設営は、やはり地元自治体、消防庁、民間マターでなんとか整備してもらうしかない状況です。これらを効率よく連携を取るのが難しい。

こちらは、震災の被害が少ないためと、地方自治体による災害対策本部が今のところ無事であることが救いではあります。

以上のような状況で、太平洋側、日本海側、ともに通信設備の復旧には、1，2週間程度の時間がかかるものと思います。

いずれも、もちろん非常用通信回線設備を優先に確保する計画です。どちらも民間レベルの通信設備復旧となると、1，2週間でも問題です。

さて、そこで、この「第三案」となります。

画面の日本地図で、中央にまっすぐに赤い線が引かれた。

それは、東京、山梨県甲府、南アルプスを貫いて、中津川から、名古屋、大阪までを結んでいる。

これが、私たちが今から復旧しようとしている日本列島縦断通信経路です。皆さん、ご存知の通り、3年後に正式運用を予定していました。

「リニア中央新幹線路」です。

東京から南アルプスまでほとんど地下トンネルです。震災の影響を考慮した施工だったため、かなり被害が少ない。

もちろん、リニアモーターカーを走らせることは不可能ですがね。

ただし、トンネル設備の天井側には民間電話会社により光ファイバー網が敷設されています。これが使用可能になれば、東京から大阪間の通信手段として非常に大きな利用価値となることは間違いないでしょう。

ただし、大きな断線箇所が3か所あります。

東京駅、甲府南駅、名古屋駅。

東京駅は津波の浸水でほぼ壊滅状態ですが、光ファイバー網自体は高所に設置されていたため復旧工事のめども立っています。関東以北の全隊が懸命に作業中です。

名古屋以南は、地上設備のため、復旧工事は比較的容易です。

まあ、そちらに比較すれば、というレベルですが。

そして、これが問題の目的地。震災と、富士噴火の影響をもろに受けてしまっていますが。

地図がさらに拡大された。

そちらの駐屯地から、富士を迂回して、その先にある。

「甲府南駅」です。

地図が、[衛星写真](#)に切り替わった。

上空[から](#)灰で埋もれた町が映し出された。

「まるで[月面基地](#)ね」と、サラが呟いた。

「続けて本作戦の今後の手順です。」

[日下](#)国際活動隊隊長の説明が続いた。

「[マギー・フィッツジェラルド](#)中尉率いるブレインストーム情報小隊7名は、これより、第一目的地として、そこ御殿場の[駒門駐屯地](#)から、[富士](#)の向こう側--山梨県忍野村にある陸上自衛隊「[北富士駐屯地](#)」に向かいます」

「途中、「[富士学校](#)」のある須走[インター](#)付近までは、[駒門駐屯地](#)の特殊車両で移動します。[富士学校](#)から、忍野村までですが、[火山灰](#)と、雁坂[トンネル](#)崩落のため、一般道は通行不能です。従って「[富士学校](#)」から[富士](#)演習場内を移動することになります」

「また、「[富士学校](#)」からの移動のため、訓練用に配備されている10式戦車を3台、使用する予定です。」

[会議室](#)がざわついた。

皆の視線が6人の女性兵士に注がれる。

「さて、第一目的地の山梨県忍野村「[北富士駐屯地](#)」の状況ですが」

「ここに駐屯していた特科部隊第1特科隊、第1後方支援連隊とも、噴火前より、[現在](#)まで、小田原で災害派遣任務についております。

その後、噴火の影響でほとんど建屋機能がマヒしてしまったため、[現在](#)、地区警務隊員10名のみが残り、近郊の災害対策に当たっております。

まあ、残り10名しかおりませんので、[実質的には駐屯地の留守番](#)です」

「忍野村付近住民は、約80%がすでに[安全指定地域へ避難](#)済みです。

忍野村には、栗本重工業の山梨工場があり、この社員が[現在](#)でも残っている程度です。これには理由があります。今回の作戦で使用する、[情報通信のための中継無線アンテナ設備](#)を栗本重工業に用意してもらっています。」

「[現在](#)の、裾野に投下されている米軍製耐性ポッドによる中継衛星回線では、[富士](#)の向こう側、山梨方面地域での通信可能範囲が非常に限られてしまうためです」

「ブレインストーム情報小隊7名は、忍野村の栗本重工業の山梨工場で、特殊通信設備の通信テストの後、河口湖から御坂峠を越え甲府南駅に向かいます」

「[上村](#)陸佐、後ほど、ブレインストーム情報小隊に作戦補佐のための自衛隊隊員を選任してください。宜しく願います」

「[目下](#)からは、以上です」

「アメリカ軍海兵隊ブレイン[ストーム情報部隊隊長](#) [サミュエル・クレメンズ大佐](#)に変わります」

画面が再度切り替わった。

今度は相模湾沖に停泊している米軍[空母](#)の作戦司令室だった。

綿毛のような豊かな[白髪](#)を伸ばしたまま梳かしもせず、口髭をたたえた[クレメンズ大佐](#)は、軍の[関係者](#)というより、[大学教授](#)か[研究者](#)のように見えた。

「[クレメンズ](#)だ。申し訳ないが、ここで[自衛隊関係者](#)は席を外して頂きたい」

画面に顔を出した[クレメンズ隊長](#)は、いつも通り余計な前置きなしで喋りだした。

再び、[会議室](#)がざわついた。

無理もない。

彼らにとってはよほどの[屈辱](#)だろう。

[しかし](#)、しばらく後には彼らは席を立ち、後には7人の隊員[だけが](#)残された。

「さてマギー、追加情報があるのだ。"鼠"がまた現れたのだ」

サミュエル・クレメンズ大佐はそう言って彼女の反応を待つかのように間を取った。

「"大富豪の鼠"とか言う奴ですか？」

「そうだ」

「場所は？」

「新潟の難民キャンプ。拿捕した暴動の首謀者達から先ほど日本の公安警察が引き出した情報だ」

「鼠」、または、「大富豪の鼠」と呼ばれる男。

その男が、日本海側難民キャンプ、及び反政府勢力を指揮し、数々のテロを企てた無政府主義者と目されていた。

民間人らしい、という情報の他、米軍側には限られた情報しか伝わっていなかった。

「そのテロリストと今回の作戦との関係は？」

「奴は、"富士を見に行く"、と言っていたそうだ」

「諸君はくれぐれも日本国民及び難民キャンプ住民の感情を逆なでははならん。「ニンジャ」のように隠密に行動するのだ。移動の用意が出来次第、引き続き作戦行動を継続するように。"鼠"の件では、ひょっとしたら、君たちに、"本来の活動"を行ってもらうことになるかもしれん」

サミュエル・クレメンズ大佐はそう言って会見を終了した。

本来の活動。

自衛隊と同様、アメリカ軍海兵隊所属のブレインストーム情報部隊も、災害対策のための部隊ではなかった。

戦闘状況下の諜報活動。

それが、ブレインストーム情報部隊の「本来の活動」だった。

あの狸。なあにが追加情報だ。

サラがブツブツと言った。

自衛隊が移動車両と補助要員を都合しているわすかの間、彼らは2班に分かれて宿舎に用意された休憩室で待機していた。サラと同じ班なのは内心閉口したが、この件に関しては、依子も同感ではあった。

作戦の概要を最初に聞いた時—

それはフィリピンから日本に向か空母の中だったが—

「リニア中央線」での通信回線復旧作業の補佐であれば屈強な海兵隊男性隊員のほうが適任であるように依子にも思えた。

それでも彼女らが選ばれたのは、噴火活動中の火山山岳地帯という特殊状況下での実戦演習も兼ねている、というのがその時の説明だったのだが。

"鼠"に関する情報が先にあり、このための諜報活動に備えて彼女らが選ばれた、そう考えた方が理にかなっている。

難民キャンプでの暴動は同一人物、あるいは同一組織が影で指揮しているに違いない、というのは、彼らの使用した武器の入手経路や、情報伝達のルートの分析から明らかであった。それが、"鼠"、または"大富豪の鼠"という、奇妙な名前で反政府勢力の仲間たちに呼ばれる民間人らしい、という情報のほかは、米国側には詳細は明らかにされてなかった。

その民間人が日本人らしい、ということも噂として飛び交うレベルのものだった。

そして、この情報開示を拒んでいたものは、日本側の内政事情というよりは、「恥」と呼ばれるこの国独特の観念が作用しているらしいことも米国政府は認識していた。

この期に及んで、いよいよ業を煮やした米国政府が独自調査を軍に命令した、というのが実際の"ことの次第"ではいか。

"鼠"の背後にいるのは、ミャンマーに逃げ込んだと目され現在まで所在不明の元北朝鮮独裁者なのか、中国なのか、さもなければロシアか。

もっとも作戦の目的を、1隊員が推測するのは、なんの意味もなかったが。

ヨリコ、あの甲府の町は、[あなたの故郷](#)ではないのか？
確か、[富士山](#)がよく見えた、という。

そう聞いてきたのは、同じ隊員のエレンだった。

[彼女は](#)、[オーストラリア空軍からの留学生](#)であり、[立場](#)としては依子と似たところがあった。依子とは仲が良かった。

同じ室内にいた隊員たちの[視線](#)が依子に集まった。

そう、エレン。あの灰かぶりの町は、[ハイスクール時代](#)を過ごした町だ。[もっとも](#)、あれでは[面影](#)もないけれど。

とんだ帰還だね、そりゃあ。サラが[特に](#)同情する気配もなく[感想](#)を述べた。

[しかし](#)、[戦車](#)に乗って[故郷](#)に帰る、ってのは、悪くない気分かな。

サラ、もう[ちょっと言葉](#)に気をつけろ、とエレンが詰め寄ったが、依子は、エレンを制した。

依子は、本当のところ、あの町の姿にそれほどショックを受けていなかった。
これは[彼女](#)自身も[不思議](#)だった。

多分、それは、あの地で生活していた頃、一緒にいた祖母が幾度となく言っていた[言葉](#)のせいかもしれない。

「ここいら辺は、みんな[富士山](#)の[火山灰](#)で出来た土地なんだよ。土が肥えるのは昔[から](#)積もった灰のおかげなんだ」

その[言葉](#)は、今のこの状況が、何千年の間幾度となく繰り返されてきた風景[なのだ](#)ということ告げていた。これが[自然](#)の姿[なのだ](#)。

埋もれた[人間](#)の町こそ、ただの新参者[なのだ](#)。

[しかし](#)、依子は、高校[時代](#)を過ごした、甲府の中心街を思わないわけではなかった。

そこではよく級友たちと[ウィンドウショッピング](#)を楽しんだ。

[街角](#)にある[ペットショップ](#)で子犬や子猫をあきもせず眺めた。

小さな[古本屋](#)で本を探し、[映画館](#)で[映画](#)を見て、喫茶店で取り留めのない噂話に興じた。

そして、[故郷](#)の[葡萄畑](#)を思った。

坂道を下る[葡萄畑](#)のための水路の、[清々](#)とした水の音を思った。

そして、

そうだ、

栗本重工[株式会社](#)。

依子のいた勝沼の町はずれに、大きな洋館があり、そこが「栗本のお屋敷」と呼ばれていた。そこが栗本グループの会長の家だと聞いたことがあった。

あまり地元の評判は良くなかった。依子の祖母も嫌っていた。

昔、なにか他人の土地に毒をまいて、その土地を奪い取って事業を拡大した、というような、妙な噂が残っていたような・・

その時、ふいになぜか、"大富豪の鼠"という奇妙な名前が突然、その回想の映像に重なった。

「変な名前」と頭の中で声がした。それは、自分の声だった。

「"ねじ巻依子"、なんて」その声は笑いを含んでいた。

「仮眠を取るものは、グレースィティからログオフしておけ。君らの夢まで記録したくなければ」

唐突に、マギー中尉の言葉が頭に響いた。これで依子はちょっと混乱した。

さっきの言葉は、外部からの声だったのか。

脳内に直接来たのか。あわてて周りを見回しても、隊員たちは皆、あてがわれたベッドで思い思いに過ごしていた。

それにしても「ねじ巻依子」って。

なんだろう。

そんな奇妙な「あだ名」で自分は呼ばれた覚えはない。

呼んだのは、自分の声のようだった。

ポッドからの電波が混信でもしたのか。

それで、ふと、ポッドから降下の後に表示して、そのままにしていた右腕の液晶画面のことを思い出した。

画面表示はOFFされていたが、軽く触れると、再度、文字は表示された。

ヘブライ語もどきの翻訳結果が表示されていた。

「水晶塔を見つける者を探せ。

知恵の木を飲みなさい。

その恐れる葡萄の黄泉を封印するのです」

ヘブライ語ならば、ラーモン少尉に聞けば、なにか分るかも知れない。

彼はイスラエル出身だったはずだ。

でも、なんて聞けばいいのだろう？

こんなことを？

依子はその画面を閉じた。

しかし、思い直して、また表示させて眺めて、

気まぐれに、大富豪の鼠、栗本重工業、ねじ巻依子、とその下に記入してみた。

水晶の塔。

知恵の木。

葡萄の黄泉。

大富豪の鼠。

栗本重工業。

そして、「ねじ巻依子」。

なんだか脈絡のない夢の中で聞かされたような言葉の羅列のようだ。

そして自分はその夢の中に向かっていくような気がした。

依子はログオフし、しばらく目を閉じてみることにした。

頭の中に想像のノートを開き、ログオフメッセージを書き込んだ。

「ログオフします」ヘッドセットから、アナライザの言葉が返答した。

「ペリーローダンシリーズはいかがでしたか？、ヨリコ。 あの話は私も大好きです。おやすみなさい」

なにを言ってるんだ、アナライザめ、

機械の癖に、寝ぼけてるのか。

だが、そう思った次の瞬間には、依子は滑り落ちるように眠りのなかに落ちていった。

[水晶](#)の塔。

知恵の木。

[葡萄](#)の[黄泉](#)。

大富豪の鼠。

栗本[重工業](#)。

[ねじ](#)巻依子。

依子の記録した内容は、バージニア州アーリントン郡にあるペンタゴンに送られた。

そこで、[グレープ](#)シティ内のある[ルー](#)チンで[自動](#)的に選別されると、

特別な[符号](#)が付けられて、

ポトマック川を越えたワシントンD.C.にあるアイゼンハワー行政府[ビル](#)に[転送](#)された。

[符号](#)が識別されると、そこ[から](#)[連邦議会図書館](#)を經由し、

[議会](#)の[立法](#)に関する様々な[情報](#)を[提供](#)する[ネットワーク](#)をたどって[大陸](#)を横断した。

そして[最後](#)に、アリゾナ州スコッツデールにある[場所](#)に送られた。

「[アルコール](#)&[ブルースカイ](#)延命[財団](#)」

と呼ばれるその建物には、[液体窒素](#)により-196℃に保たれた人型の保存庫があり、

そこには半[永久](#)的に施設内に保存されている[全裸](#)の[青年](#)が横たわっていた。

保存庫には様々な計測器が[接続](#)されており、内部の状態を[一定](#)に保っていたが、

実に60年ぶりに、それらの値が僅かに変動した。

2042年4月20日。

ぶうーん。ぶるん、ぶるん。

飛行機のプロペラ音が、穏やかに晴れた空に響いた。

あれは、富士山の観光用のセスナ機かもしれない。

依子のいる、矢島家の2階の部屋の窓からも、富士山が見えた。

5月の富士は、頂きから中腹まで雪をのせ、その山体のなだらかな曲線は青い空を切り取っているようにくっきり見えた。

依子は、しばらくそんな窓の外の景色を眺め、深呼吸して気持ちを落ち着かせたると、部屋の壁に掛けられた時計を振り返った。

時計の針は、ちょうど、11時を指していた。

午前11時。

坂の上の病院から、神輿祭りの準備を見て回り、ここ、矢島家に帰ったのは、早くても10時頃だったはずだ。やはり、それから1時間くらいしかたっていない。

そして、今度は、部屋の片隅に積まれた、文庫本の山をもう一度眺めた。

そこには「ローダン・シリーズ」と背表紙に書かれた文庫が、1巻から25巻まできれいに積まれていた。

つい夢中になり、没頭して読みふけてしまった。気がついたら、1巻から、25巻まで一気に読んでいた。それも、わずか1時間で。

まさか。ひょっとして、丸1日と1時間たってしまったのではないか。そうも考えたが、もちろん、そんなこともありえなかった。

そのシリーズ本は、あまりSF小説を読んだことがなかった依子には、初めて読む本だった。

依子は、積み上げられた本の中から、

「<3>ミュータント部隊」と書かれた本に意識を集中させた。

すると、頭の中に文章が湧きだした。

「ペリー・ローダンが催眠教育からめざめたとき、……ローダンは自分の頭脳内部を凝視して、そこに無限の空洞を見た。……知識は信じられぬほど積みかさねられ、そう希望しさえすれ

ば・・・ただちに解答をえられるのであった。・・・」

「<24>地球替え玉作戦」と書かれた本に意識を集中させた。

「小型円盤の一機にジャンプした瞬間、タコ・カクタは、罨に落ちたことを知った。円盤の内部もやはりまるい。・・・ここへジャンプした瞬間、円盤が動きだすかるいショックをタコは感じとった。どこか遠方にあるメカニズムがかれの到来をチェックし、誘拐しようとしているのだとわかった。」

次々と頭の中に文章が湧きだした。

難しい小説ではなかったし、本が好きだった依子は、かなり本を早く読めた。没頭すると寝食を忘れて読みふける癖もあった。

しかし、こんなペースで読めるなんて。

いくらなんでも異常だ。

私の頭はどうにかなってしまったのだろうか。

「もの忘れがひどくなる」という話はよく聞くけど。

「もの覚えが早くなる」なんていうのも病気の一種なの？

その2

依子の居る部屋、従兄の元幸の部屋は、16畳ある大きな部屋だったが、[現在](#)も機織業をつとめ、その昔は[兼業農家](#)だった[矢島](#)家では、部屋の広さとしては、ごく[普通](#)の広さだった。

元幸の本は、その広い部屋の壁一面を、ほぼ独占していた。それもほとんど[文庫本](#)ばかりだったので、かなりの量だ。そのほとんどが、SF[小説](#)か、[ミステリ小説](#)のようだった。[海外](#)の作品が多かった。

部屋の主—従兄の元幸は、[現在大学受験](#)のために[浪人](#)しており、[東京](#)の依子の家に[居候](#)して、この[ゴールデンウィーク](#)の[連休](#)中も、依子の家から都内の[予備校](#)に通っていた。

依子は、その従兄と入れ替わりで、母の実家である、ここ、山梨は勝沼の[矢島](#)家に遊びに来ていたのだった。

勝沼で寝泊りするのために、この部屋を自由に使って構わない、というのが従兄の元幸との[約束](#)だった。

ヨリちゃん、もし勝沼の家で退屈な時には俺の本でも読みなよ。[小説](#)でも。[漫画](#)でも。ヨリちゃんは本好きだからなあ。許す。そう言っていた従兄の元幸も、負けず劣らず本好きだった。その壁一面の[本棚](#)には、[受験生](#)らしく、中には[参考書](#)のたぐいもあった。

依子は、今度はその中から、ためしに「[大学への数学](#)」という黒い表紙の[ハードカバー](#)を手にとってみた。

どちらかというと[文系](#)で、高校2年生になったばかりの依子には難しい内容だ。

本を開いてみる。

「[微分法とその応用](#)」。

[積分記号](#)と、その後続く数式の羅列が目に入った。

突然、その[数字](#)が立体的に本から飛び出して見えた。

[数字](#)の「3」は黄色くて、[金属](#)のような[匂い](#)がした。その「3」の[性格](#)は、[毅然](#)としており、それが「1」と重なると[女性](#)のように淑やかにふるまった。

[積分記号](#)でくくられた文字式は、[和音](#)のような[音楽](#)を奏でた。その音からは、梅の花のような[匂い](#)がした。

依子はあわてて本を閉じた。

とたんに、頭でなっていた音楽が止んだ。色も匂いも消えた。

なんなの、今のは。

依子は、一気に冷や汗が背中にふきだすのが分かった。本の中から、数字が踊りだすところだった。

やはり私の頭は、どうにかなってしまったのだろうか。

その時、突然、カタン、と背後で小さな音がして、びっくりして、依子は振り返った。

猫のミィが、襖の隙間から顔を出して、依子を見ていた。依子は胸をなでおろした。

なんだ、ミィちゃん、こっちにおいで。

呼ぶと、人懐っこい鳴き声で近ずいてきた。抱いて頭をなでてやる。ミィは、依子の腕の中で気持ちよさそうに喉をならした。

すると、自然と、抱いている依子の気持のほうも落ち着いてきた。

そうだ。

あの時からだ。と、依子は思い出した。

今朝、幸恵と一緒にの帰り道で、「あの声」を聞いたときからだ。

坂道の途中に建てられていた奇妙なテントの出し物の、上に立つ人影を見上げた時。頭の中に「グレープシィへようこそ」と妙な大人の男の人の声が聞こえた。

同時に頭になにか温かいタオルを巻かれたような感触があった。

それからずっと、「音」と言うよりも「振動のようなもの」が頭を揺らしているような感覚が続いていた。

頭痛というほど不快な感覚ではなかった。

むしろ今までせき止められていた流れが解放されて頭を駆け巡っているような爽快感さえあるのだが. . . .。

依子は猫のミィを抱えながら、今度は冷静に、別の小説を読んでいった。

数学関連の本にだけは近寄らないように注意しながら。

そうして、じきに、読めば読むほど、頭に入れるコツのようなものを覚えていった。

物語を楽しむのではなく、写真を撮るように見開いた本を眺めると、ほとんど瞬間的に頭に入っていた。いつでも引き出せるので、物語を楽しむことは後でもできた。

これは。

依子はどんどん小説を頭に入れていった。

ちょっと面白いかも。

だんだんゲームのような、「楽しさ」さえ出てきた。

猫のミィは依子の腕の中で満足気に目を細めて、その様子を見ていた。

依子ちゃーん、と下から、依子を呼ぶ、幸恵の声がした。

そろそろ、お昼の支度しなあーーい ？

時計を見ると、11時半だった。

その頃には、依子は部屋に置いてある小説をほとんどすべて「読み切って」しまっていた。

小説は全部で300冊近くあったのだが。

その3

矢島家の向かいにある機織機のある小さな工場は、がったんがったんと毎日忙しくリズムを刻んだが、昼休みにはしんとして、ひとときわ静かになり、遠くからは鳥の声が聞こえた。

矢島家の昼食は賑やかで、機織工場で働く職人たち-と言っても近所に住むおばさん達なのだが-家族と一緒に食卓を囲んだ。

大勢で囲む食卓には、たいがい大きな箸に入った大盛りのうどんが真ん中に置かれ、よく鰹のダシがきいたつけ汁がふるまわれた。

今日はお祭り

と依子への歓迎のもかねて、のり巻きや、いなり寿司もならんだ。

矢島家で機織りを手伝うおばさん達も依子のことは子供の頃から知っていたし、皆、気ごろの知れた仲だった。

子供の頃から、母に連れられて、ここ勝沼の矢島家に遊びに来ていた依子は、自然に彼らの輪の中にいた。

この賑やかな田舎の昼食も、依子には楽しみの一つだった。

東京の家では両親とも共働きで、おまけに一人っ子の依子は、中学生頃から一人で食事をするのが常だったからだ。

叔母の知恵はじめ、同じ年の従姉妹の幸恵や、祖母の八重とともに依子も食事の準備を手伝った。

その時にも叔母の知恵はしきりにまだ依子の手の甲の怪我を気にしていたが、傷口はもう完全にふさがっており、その傷跡さえ消えかけていた。

あらいやだ。

ほんとうに凄い回復力ね。

あれだけ血が出てたのに。

夢みたいね。

叔母は妙に感心していた。

義姉さんに連絡しなくちゃと思っていたけど、どうしよう。

依子は、お母さんには私から言っとくから大丈夫よ、とあわてた。

母に知れたら即座に呼び戻されるのが目に見えていたからだ。

まだ来たばかりなのに。[冗談](#)じゃない。

食事も終わり、片付けも終わると、大人たちは機織[工場](#)に[仕事](#)に戻り、祖母の八重と、依子と、[小学生](#)の隆三が残された。

幸恵は食事を済ませると、午後の3時[から](#)高校でバスケの練習があると言い、そそくさと出かけていった。

ヨリちゃん、バスケ終わって帰ったら一緒に[お祭り](#)に行こう。里美ちゃんたちも呼んで来るよ。

里美ちゃんというのも、この近所に住む幼馴染だ。

里美ちゃんも一緒にバスケやってるんだよ。ヨリちゃん来てる、と言えば飛んでくるよ、きっと。

幸恵が出て行ったその少し後には、今度は隆三の遊び[友達](#)が[お祭り](#)を見に行こう、と誘いに来た。

そんな具合に、結局、祖母と2人だけとなり、急に静かになった広間で、依子は[裁縫](#)をはじめた祖母に何気ないふうを装って、思い切って切り出してみた。

おばあちゃん、「栗本興業」って知ってる？

祖母は、「くりもと」さん？と顔をあげ依子を見た。

そう。

[病院](#)の帰りに[お祭り](#)見ててね。

大きな[テント](#)の出し物があって、「栗本興業」って書いてあったんだ。

ああ、その栗本さんね。

依子も知ってるでしょう。町はずれの川岸にある大きな[洋館](#)。あれが栗本さん家だよ。ああやっぱりそうか。と依子は思った。

確か、大きな[シェパード](#)を2匹も飼っている家だった。

実は、幸恵ちゃんがね、その[お祭り](#)の出し物を見て、栗本は好かん、てなんかすごい剣幕だった

んだけれど。

なにかあるのかしら。

へえ。

幸恵が。ねえ。

祖母は遠くを見るような眼をした。

やがて、ああ、と呟いた。

なにかあるの？

いやだよ。

昔の話。

ずっと昔。

戦争が終わってすぐの頃ね。

ほら、今朝、依子の行った**病院**の近くに、戦争中に建てられた施設があったのよ。

丘の上に？

そう。戦争中には**軍人**さん専用の**病院**だったんだ。

そうだねえ。あれは、戦争が終って、しばらくして、どうにか生活も落ち着いた頃だったねえ。

その施設の跡**から**、なにやら使っていた薬が間違っ**て**丘の向こう側の畑の水路に**漏れ**出したことがあったんだ。

その水路の水を使っていた向こう側の畑は、その薬にやられて一面**ダメ**になってしまったことがあったんだよ。

どうやら**治療**用の**消毒薬**やらなに**から**しいけどね。

へえ。と依子。でも今は**大丈夫**なのね。

そうだよ。

その**ダメ**になってしまった土地を当時買い取ったのが、その栗本さんだったね。

土を治すためにたくさん人を使って、新しい土に入れ替えたりしてね。
1年後には元通りに畑が実るようになったんだよ。

だったら栗本さんは恩人じゃない。

それがね。その土地を売った人たちはそうは思わなかったんだよ。
なにしろもうダメだと思ってよっぽど安く売ったらしいのね。
あれほど荒れた畑が1年ぐらいで元通りになるのはおかしい。ってね。

おかしいのかしら？

さあ。分からないね。でもいろいろ調べたらうからね。そんなインチキが出来るとは思えないけどねえ。

ただ、栗本さんは農家じゃない。元々、工具や工場で金物を作る商いをやっていた所だからね。
そこが農地買い取るから、てっきり皆、工場でも建てるのかと思ったの。
だから畑に戻すのは、皆、ちょっとびくりしていたね。

おまけに数年後には、あそこの農地が大きな会社と契約出来たしね。
今はすっかり一番の土地だ。東京の会社の人が管理しているらしいけど。

ふうん。

そんな話があったんだ。

まあそれで、ちょっと栗本さんを嫌う人たちもいるんだね。

幸恵もどこから聞いたのかね。

今更そんな話なんてね。

その4

依子のいる[矢島](#)の家は、勝沼町の[葡萄畑](#)の広がる山間にあった。

その山側[から](#)、南に向かってなだらかに下ると、やがて大きな国道にぶつかる。

その国道を挟んで[東西](#)に勝沼町の中心街が広がっていた。

[もっとも](#)、中心街と言っても、目立つ建物は学校と大きな公園ぐらい[のものなのだが](#)。

[中央線](#)の勝沼駅は、その町の東側のはずれにあった。

川はその中心街[から](#)さらに南に下った町の南端側を、東[から](#)西へと流れていた。川の[名前](#)は、「日川」と言った。

その日川を橋で渡ると、その先には、[東西](#)に中央高速の高架と、それに並走して国道20号線の勝沼バイパスが走っている。

さらにその高速も横切って南へ直進すれば、そこ[から](#)先は、隣町の一宮町だった。

一宮町は、ちょうど御坂峠への登り口の町であり、その御坂峠を越えた向こうには、[富士山](#)の姿があった。

勝沼町側[から](#)日川を渡ると、高速と勝沼バイパスを走りかう車の量こそ圧倒的に多くなる[もの](#)、町の中心街[から](#)は外れているために民家の数は少なくなっていた。

日川沿いには、勝沼氏館跡という、[戦国時代](#)の城跡があった。

城跡は川の右岸側の丘上に位置していた。

その丘への登り口、橋のたもとに建っていたのが「栗本の[洋館](#)」だった。

依子は、今、その川の橋の上[から](#)、栗本の[洋館](#)の裏側を見ていた。

なんとなく、そこまで歩いてきた[もの](#)、[特に目的](#)があったわけではなかった。

[子供](#)の頃には、この町に遊びに来るたびに、[矢島](#)家の[自転車](#)を借りて、町の中心街[から](#)、その川沿いの道もよく乗り回していた[もの](#)だ。

[もっとも](#)、今では、この町での依子の行動範囲はずっと狭[まり](#)、こんな風に川まで[下り](#)てくるのも久しぶり[なの](#)だった。

父や母と、車で勝沼の家を訪ねる時には、[東京](#)[から](#)中央高速の勝沼[インター](#)経由でこの町に入ってきたので、今、依子の立つ橋はちょうど町への入口だった。

[だから](#)「栗本の[洋館](#)」は、[東京](#)[から](#)の訪問者たちには、勝沼町への[入り口](#)に立つ[門番](#)のようにも

見えた。

洋館の表門の脇にはいつも大きなシェパードが2匹いて、大きな車が入り出ており、子供の依子には近寄りたがたい雰囲気があったことを覚えている。

橋から眺めると、洋館の背後の川岸には鬱蒼とした木々が生い茂っており、川面ははるか下に落ち込んでいた。

わざわざその正門側から覗くのも気が引けたので、橋の上からこうして眺めてみたものの、洋館の裏側にある大きなバルコニーには、今は人の気配はなく、まるで川を覗きこむ要塞の無人の監視塔のように見えた。

なぜ自分がこれほどその洋館を、もう一度、自分で見てみようと思いついたのかもよくわからなかった。

よく子供の頃に見た景色を、大人になった目で見直すと見慣れたはずの景色がまったく違ったものに見えることがある。そんな感じを試してみたくなくなったのかもしれない。

あの行儀のよいシェパード達はまだ変わらずに洋館の門番を勤めているのだろうか。

それは洋館の裏側の橋の上からは確かめようがなかった。

せっかくここまで足を延ばしたのだから、思い切って表側の道から洋館を見てみようか。ふとそんなことを考えた時だった。

沈黙していた要塞の監視塔のようなバルコニーの窓が開き、男女の二人連れが姿を表した。

依子はちょっとびっくりして、隠れるように死角になる橋脚の影に身をひそめた。

そんな反応はまるで張り込みをしているTVドラマの刑事のようだ。自分でもちょっとおかしかったが。

しかし、その二人連れの男のほうが、バルコニーから川を眺め煙草を吸っている様子を盗み見ると、

依子の"張り込み"に、思わぬ収穫があったことが分かった。

そのバルコニーの男性は、今朝、依子を診察した、丘の上の病院の若先生に違いなかった。

先生は煙草の煙を大きく吐きながら、今、バルコニーへ出てきたばかりの後ろの女性に笑顔で何か話しかけている。

後ろの女性は、暗い色の洋服を着ていたが、長い黒髪と、細長い体の線が印象的だった。

顔立ちまでは分からなかったが、その女性はストールを手にして先生に歩み寄ると、

やがて先生と並んでバルコニーの手摺に背中をもたれるようにして先生と向かい合った。

そんなバルコニーでの振る舞いも自然で、どこか毅然とした女主人のような雰囲気があった。それで、あの女性は、栗本家の女性に違いない、と依子は思った。

バルコニーの手摺にあずけられたその背中の細長い影は、依子の目からも艶めかしく見えた。先生は女性と並んで、手摺に両手をあずけて、さも楽しそうに笑っている。

そんな無防備な二人の姿は、依子の目にもただらなぬ関係を思わせた。

それで、ふと、「栗本のやることはすかん」という幸恵の言葉を思い出した。ああ、こういうことか、と依子は納得した。

どうやら、祖母から聞いた戦後の話よりも、幸恵が気に入らないのは、その女性の存在に違いない。

幸恵ちゃん。でもあれはちょっと勝ち目ないかもね。

バルコニーでの若先生の、その女性に対する無邪気な笑顔を盗み見ながら、

依子は、今頃は高校の体育館で走り回って、青春の汗を発散しているに違いない幸恵を思い、ちょっと同情した。

その5

バタバタと階段を駆け降りる音がする。幸恵だった。

さあ、お祭り、お祭り、ヨリちゃん、行ってみよう！。

浴衣に着替えて、袖をくるくる回しながら、ご機嫌な顔をしている。

そんな無邪気な幸恵を見て、その浴衣姿のままで今どうやって階段を駆け下りてきたのだろうか、と依子は内心ヒヤヒヤした。

依子は洋服のままだった。

叔母の知恵からも、せっかくのお祭りだし、幸恵のでもよかったら浴衣に着替えれば、と勧められたが、つい今朝のことを思うと、着なれない浴衣で今度は転んで怪我でもしたら、と、ちょっと気が進まなかったのだ。

次に、がたがたと、凄い音が、今度は天井で鳴った。

ニャア、と続けて興奮したミィの声が響いた。

おお、鼠でもいるのかね、と祖母の八重はのんびりと天井を見上げた。

驚いたことに、その次の瞬間には、依子と幸恵の2人の前に、突然、大きな黒い塊が降ってきた。

。

それは、玄関先の地面に衝突する瞬間に、パッと翻ると、見事に着地した。

夕暮れの中では、まるで大きな鳥のように見えた。

よく見ると、猫のミィだった。

2階から落ちてきたらしい。

依子は、目の前に降ってきたその猫の着地までの見事な空中の姿を、まるでスローモーションのように見ていた……。

ミィは、そのままキラキラ目を輝かせて、2人を一瞥すると、さっさとまた走り去って行った。

昼間ののんびりした姿とは、まるで別の生物のようだ。

うひゃあ。

驚いたね、ミィかいな。

幸恵が、思わず素っ頓狂な声をあげた。

やっぱり飼い主に似るのね。

と、見送りに出ていた叔母は、ため息をついた。

2人が表の道に出ると、そこにはやはり浴衣姿の里美が待っていた。

里美は、依子たちと同じ年の幼馴染だ。

幸恵と同じ高校に通い、同じバスケット部で活動していたので、幸恵がお祭りに誘っていたのだった。

依子が久しぶりに見る里美はすっかり背が伸びて、まるで別人のように見えた。

ヨリちゃん、ひさしぶりねえ。

依子と里美が挨拶を交わしながら歩き出すと、矢島の家から小さな影が駆けてきて、お姉ちゃん！ぼくも連れてって！

と3人を追いかけてきた。

隆三だった。

ちえっ。やっかいだな。

チビさん、お姉ちゃんの言うこと聞くのよ。と、幸恵が呟いた。

神社に続く坂道には両脇の民家に明かりのついた提灯がつるされ、暗い夜道をほんのりと照らしていた。

神社の境内には夜店の明かりで、遠い坂道の下からも、見上げると明るい光の塊に見えた。

そちらからは、祭り囃子も風に乗って響いてきて、依子もなにかわくわくしてくるのだった。

ねえねえ、お姉ちゃん、さあ。

歩きながら隆三が姉の幸恵の帯を後ろから引っ張った。

ぎゃ。リュウちゃん、そこ引っ張っちゃダメよ、もう。

あのさあ。

ぼく入りたいお店があるの。ねえ。一緒に行こうよ。

お母さんもお姉ちゃんと一緒なら「いい」って。

えー、どこよ。それ。リュウちゃん。射的場？。

違う。もっと凄いよう。

ほら、あれだよ！

あのテント。

神社へと登る坂の中腹にある広場に、大きなテントが張られていた。

大きな丸いドーム型に広がったテントの上には、今、大きな一つの目玉の模型が張り出されていて、それは周囲を見渡しているように見えた。

色とりどりのネオン管が、その目玉の縁をきらびやかに飾っていた。

大きなテント本体は、まるで、ナイターの試合場のように投光機で囲まれ、暗闇から照らし出されていた。

光の中には、「栗本興業」という看板も見えた。

広場の入り口には、ちょうど運動会の入場門のようなゲートが掲げられていた。

そのゲートから、テントの入り口までは、子供連れの長い行列が出来ていた。ざわざわと人々の声がした。

テント入口は映画館のモギリのようにになっている。

広場の入り口のゲートには、

「水晶の塔」と大きな文字が踊るように書かれていた。

その6

日が暮れると、町には笹子峠からの吹き下ろしの風が吹き、それがこの土地の熱をすっかり奪い取っていく。

この昼と夜との寒暖の差の激しさは、[葡萄](#)の育成の地にはなくてはならない[もの](#)だったが。冷気がひっそりと降りてきて、依子はぶるっと身を震わせた。

それが[自分](#)の目の前に現れた奇妙な[見世物小屋](#)の[雰囲気](#)のせいなのか、それとも久しぶりに歩いた土地に体が慣れていないせいなのか、依子には分[から](#)なかった。

隆三に引っ張られながら、依子たち4人は、その[テント](#)の[入り口](#)に近づいてみた。

[水晶](#)の塔ですって。甲府の[宝石センター](#)あたりから持ってきたのかしら。里美が呟く。

新興宗教の勧誘みたい。[水晶](#)玉でも売りつけられるのが[オチ](#)なんじゃないのお。と幸恵が[不愉快](#)そうに言った。

依子は大きな[テント](#)を見上げてみた。

[テント](#)正面[入り口](#)の大きな目玉の[模型](#)には、長いまつ毛がついており、時折[機械仕掛け](#)で[ウィンク](#)をした。

近づいてみると、その目玉にも、どことなく[愛嬌](#)があるようにも見えた。

その時だった。

あれ、ユキエじゃないか、と太い男の声がした。

声に振り返ると、[トレーナー](#)に[ジープ](#)姿の、ちょうど依子たちと同年輩ぐらいの男が2人立っていた。

うわ、[浴衣](#)かい。へえ、ユキも[女の子](#)に見えるね。

2人連れの男の片方がそう笑いながら近づいてきた。

あれま。[カズマ](#)だよ。と幸恵は里美にこっそりと呟いた。

里美は何も言わずに[うつ](#)むいてしまった。

どうやら、知り合いらしい。

失礼な。カンペキに、[女の子](#)でしょう。ほらあ。

近ずいてきた[男子](#)達を前に、幸恵は、日本人形のように、しなを作って、そのポーズのまま一周回って見せた。

わかった、わかった、と「[カズマ](#)」と呼ばれたほうがまた笑った。

[男子](#)は2人とも頭は[坊主頭](#)で、背が高く、がっしりした体つきだ。野球でもやっているのか、まだ5月になったばかりだというのに顔は[日焼け](#)をしているように黒かった。

あれ、サトミちゃんも一緒なのか。

これ[から](#)見るの[かい](#)、これ？ [カズマ](#)が[テント](#)を見上げた。

どうしようかと悩んでたのよ。なんの仕掛け？これは？。幸恵が聞くと、

今見てきたけどさ。ただの[映画](#)だよ。立体[映画](#)。と[カズマ](#)は答えた。

リットイ[映画](#)？

ほら、赤と青の[メガネ](#)かけて観る「飛び出す[映画](#)」ってやつ。

昔流行ったろ？ [隕石](#)が落ちてくる、みたいな。違っ[たか](#)なあ。

なんだあ。珍しい[水晶](#)が飾ってあるのかと思ったけど。

ああ、[映画](#)の中に出てくるんだよ。

[未来](#)を覗くことができる「[水晶](#)の塔」とやらが。びびびーって。なっ？

と、[同意](#)を求めたのは一緒にいる男だった。

へえ、それだけ。拍子抜けのような眩きが幸恵の口[から](#)洩れた。

うん、それだけ。と[カズマ](#)が答えると、

まあ、残念ながら[子供](#)だましでしたよ。と、今度は[カズマ](#)の連れの[男子](#)は妙に[あらた](#)まった様子で念を押した。

ああ、コイツは同じ部の「[サイト](#)ウヒデキ」って言うんだ。

こちらは、バスケ部の、知ってるよね、「ヤジマユキエ」さんと、もう一人は、「[テラ](#)ダサトミ」さん。

それで、さて、ええと。そちらは[・・・](#)?と、依子を見る。

私の従姉妹のヨリコちゃん。[東京から](#)遊びに来てるのよ。

そう幸恵に紹介されて、依子も軽く頭を下げた。

これから観るの[かい](#)?これ?

どうしようか[しらねえ](#)。と、幸恵はチラリと隆三を見た。

隆三と言えば、[テント](#)入口に飾られた、スチール[写真](#)に熱心に見入っていた。

夜空を背景に、一直線に続く[道路](#)の向こうに光が差す[写真](#)。

2つの月が上がっている砂漠。

どこかで見たような[ハリウッド映画](#)のワンシーンのような風景が[写真](#)で飾られている。

噴火した[火山](#)の[写真](#)もあった。

[恐竜](#)がヤシの木の向こう[から](#)こちらを覗いている[写真](#)。

森の上に流れ星のような光が輝いている[写真](#)。

「驚異の[過去](#)。[不思議な未来](#)。[あなた](#)を待つ[水晶](#)の塔の壁に、その[世界](#)が次々と映し出されていく」

と、そのスチール[写真](#)の飾られた化粧枠の上には、宣伝文句が踊っている。

実は7時からの「[のど自慢大会](#)」にさ、「ノグチ」が[エントリー](#)したらしいんだよ。

ええっ!。[ホント](#)?

よくやるう。

幸恵たちは、[カズマ](#)達となにやら盛り上がっていた。

依子は[写真](#)に釘づけになっている隆三と並び、それらを眺めた。[しかし](#)、[子供](#)だましとは言え、これは隆ちゃんぐらいには、夢中になってしまうだろうと、依子には思えた。

[テント](#)の裏手の広場を見ると、どうやらそこは[お祭り](#)会場用の[駐車場](#)になっているらしい。

依子はその車の中に、[黄色い](#)[フォルクスワーゲン](#)があるのを見つけた。

それは、丘の上の病院の若先生の車に違いなかった。

依子はその栗本の洋館での"張り込み"の後、結局、帰り際に洋館の正門を回って帰ったのだった。そこで出くわしたのが、その黄色いワゴンに乗って洋館から出ていく運転席の若先生と、助手席には髭をたくわえた老人が座っていた。

依子のたよりない記憶によれば、その助手席の老人は丘の上の病院の院長先生だったはずだ。栗本の洋館の玄関には、その車を見送る、例の黒い洋服を着た女性が立っていた。車を見送り丁寧に頭を下げていたその女性は、やはり女優のような美しい女性だった。黒い長い髪に、白いほっそりとした顔。切れ長の目と引き締まった口元が、その女性の意志の強い個性を感じさせた。

それがさあ、5位までの入賞賞金が5万円相当の商品券だってんで燃えてるんだよ、ノグチのやつ。

アハハ、金目当てかい。

ノグチらしいなあ。

笑い声で盛り上がっている幸恵たちに近寄ると、

ユキちゃん、友達の応援に行っておいでよ、リュウちゃんなら、私が面倒みておくよ。

と依子は言った。

結局、依子が隆三を連れて、2人で「[水晶](#)の塔」へ入ることになった。

さすがに幸恵も、依子一人に頼むのは気が引けて、[最初](#)は依子の申し出を断ったものの、大人の入場料金が、[映画](#)の[ロードショー](#)料金とさほど変わらないのを見ると、さすがに隆三への付き添いのために、大人3人が気楽に付き合うわけにも行かなかった。

それに、この手の[映画](#)に関心が無いわけではないのは、昔[から物語](#)を本で読むことが好きだった依子だけだった[から](#)だ。

それで、料金は幸恵と折半することにして、依子一人が隆三の付き添いで「[水晶](#)の塔」に入ることになったの[である](#)。

「いらっしゃいませ」と[テント入り口](#)では[若い女性](#)が[切符](#)を愛想よく受け取る。

[女性](#)は[迷彩服](#)を着ており、頭には草の葉がついた[ヘルメット](#)を被って、まるで秘境への[探検](#)隊隊員のような[雰囲気](#)を出している。

こんなふうに案内係の[女性](#)にまで凝った演出をしているのは初めて見たので、依子は感心してしまった。

[チケットカウンター](#)を兼ねる回転式のゲートを抜けると、その先は[カーテン](#)で仕切られている。案内係の[女性](#)が開けた[カーテン](#)を通して中へ入ると、すうっと、[涼しい](#)風が中[から吹きつけて](#)きた。

「中は暗くなっており[ます](#)ので、足元にお気をつけ下さい」

その[カーテン](#)の裏は、薄暗い少し広い[エントランス](#)になっており、[ブルー](#)の[蛍光灯](#)で、奥へと続く通路が照らされていた。

まるで[水族館](#)の中のような、と依子は思った。

通路は、右側の[テント](#)の壁に沿って[スロー](#)プになって奥へと登っている。その登り口の脇には、がっ[しり](#)とした体格の男が立っていた。

男は、背広姿で、髪は短く刈り込まれており、両耳には[イヤホン](#)のような器具をつけていた。

「[水晶](#)の塔へ、ようこそ」

さきほどの案内係の[女性](#)の声が、依子たちを包み込むように響いた。

行こう！ヨリちゃん！

隆三に引っ張られるようにして、依子は、その先のなだらかな[スロープ](#)を登り始めた。

途中で黙って立っている背広姿の男の脇を通るのがなんだか不気味だったが。依子達が通過しても、男は、客には無関心のようなようだった。

案内係の[女性](#)に比べてなんで野暮な背広姿[なのだろう](#)。

それになんとか無愛想にもほどがある。

依子は奇妙な感じがした。

この催し物の[関係者なのだろう](#)か。

その男の態度は、まるで見張り役の[用心棒](#)のようだった。

「この[不思議](#)な回廊の[スロープ](#)は、
出口側とはちょうど二重[らせん構造](#)の道になってい[ます](#)。
[ゆっくり](#)と坂を登ってください。
[お客様](#)を[水晶](#)の塔の中心部へのご案内いたし[ます](#)。」

案内係の[女性](#)の声が、依子たちを搭の奥へと誘った。

「この搭の[構造](#)は、
福島県会津若松市、飯盛山に現存し[ます](#)「会津さざえ堂」、
正式[名称](#)「円通三匠堂」(えんつうさんそうどう)を模して造られました。」

「この[不思議](#)な[構造](#)は、イタリアのルネサンス期を代表する[天才](#)、
レオナルド・ダ・ビンチの[アイデア](#)が、遠く[東洋](#)の国、
日本まで伝わったのではないか、という[伝説](#)もあるのです。」

「回廊の壁には、[私たち](#)の住む[惑星](#)、[地球](#)のたどってきた道 [古代から](#)の歴史が刻まれており[ま](#)
[す](#)。」

なるほど、回廊の中心側の壁には、ところどころ飾りのついた[水槽](#)のように化粧枠が設けられて
おり、
そのコーナーの中には[古代生物](#)の[化石](#)のようなものが並べられている。
もちろん[レプリカ](#)だろう。

しかし、残念なことに奇妙な形をした古生物の化石レプリカ類は、人形のようにただ並べて飾ってあるだけだった。

1つ1つにせめて説明書きでもあればいいのだが。

だが、この薄暗い回廊には、そこまでの準備はできなかったようだ。

「これらは、この塔と同じ2重らせん構造の、私たちの、DNAが辿ってきた道でもあるのです」

案内係の女性の声が続いていた。

ヨリちゃん、「でい・えぬ・えい」ってなに？

と、唐突に、隆三が依子を見上げた。

ええっ？

依子は、ハタと困ってしまった。

DNA？

聞いたことはある言葉だけれど。

確か免疫とか細菌の……

「デオキシリボ核酸」と、依子の頭に「声」が答えた。

「地球上の、おもな生物の遺伝情報を担う物質」

ふうん。

隆三は、感心したような顔をして、壁に並べられた古生物のレプリカを1つ1つ眺めながら登っていく。

あれはなに？ ねえ？

隆三は、今度は壁に掲げられた、奇妙な2本の牙のようなものを口先から出した魚を指差した。

「[アノマロカリス](#)。[カンブリア紀](#)の[生物](#)」

ふうん。凄い。「[カンブリアキ](#)」っていつ頃？

「5億4200万[から](#)、4億8800万年前」

へええ。あれは？ あの大きな黒い壁の絵はなあに？

「[超大陸ゴンドワナ](#)」

ちょうたいりく？

「[オルドビス紀](#)に、[地球](#)上の陸が1つに集まって作られた[超大陸ゴンドワナ](#)には、[現在](#)のアフリカ、南アメリカ、南極、[オーストラリア](#)が含まれる。」

へええ。昔はみんな1つの陸地だったんだ。

感心する隆三の様子とは、裏腹に、依子は内心それどころではなかった。

次から次に、頭の中に湧いてくる「声」。

これはいったいなんだろう。

もちろん依子の知識の範囲を遥かに超えている。

ひょっとしたら、[今日](#)の昼前に読んだ元幸の本にあった知識[なの](#)だろうか？

でも、そうだとすると、どうやって頁もめくっていない本[から](#)の知識が出てくるのだろうか？

また、[背中](#)に冷や汗が吹き出ているような気がして、依子はふと振り返った。

回廊の[エントランス](#)は、もはや登ってきた[スロープ](#)の曲線に隠されて見えなかった。

だが、[ブルー](#)の[蛍光灯](#)の明かりの下で、先ほど、[スロープ](#)の登り口に立っていた背広姿の男が、依子のほうを、じっと見上げていた。

あの男も今「私の声」を聞いていたのだろうか？

妙な知識を披露していた「私の声」を？

その男と目があつたような気がした。

男は、右耳に[右手](#)を添えて、何か喋っているようにも見えた。

男は、次の瞬間には、依子から、ふと視線を外した。
ポケットから眼鏡を出すとそれを顔に掛けた。
それは、細長いサングラスのように見えた。

この暗闇でサングラス？

「夜間射撃用グラス。スミス&ウェッソン社製」
と、依子の頭の中で、「声」が答えた。

その8

その回廊を、[テント](#)の外壁に沿ってちょうど半周ぐらいすると、依子たちは広い[フロア](#)について。
そこには数人の子連れの前客たちがいて、ざわざわとしていた。

依子は少しほっとした。[フロア](#)の造りは、なるほど[映画館のもの](#)にそっくりだった。

かなり広くスペースがとっており、柵に覆われた、おおきな[恐竜](#)の[模型](#)が中央に置かれ、柵の周りには[子供](#)たちが群がっている。

[フロア](#)の、登ってきた「入口」とは、逆側のつきあたりに、「出口」と書かれた[スロープ](#)の降り口が見えた。

「出口」は、今度は逆回りに半周、[スロープ](#)を降りて、[テント](#)の裏側、ちょうど[お祭り](#)用の[駐車場](#)になっていた広場の方向へ出られるのだろう。

「出口」の脇には、やはり[探検](#)隊のような[ヘルメット](#)と[迷彩服](#)を着た小柄な[女性](#)が[ニコニコ](#)しながら立っていた。

それで、先ほどの妙な背広の男は、この出し物とは関係のないただの客だったのだろう、と依子は考えた。

[しかし入り口側から](#)先ほどの男が上げってくる気配はなかったが……

[フロア](#)の脇には、上映室への大きな扉が2つ並び、その扉をあけると前面には縦横3 m程度の小型[スクリーン](#)が3面、横に並んで広がっていた。その[スクリーン](#)の前に観客席が並んでいる。

[最前列から](#)横に5つほどの座席が並び、それが4列ほどあった。定員20名ほどというところか。

[ホント](#)になんだか都内の古い[名画座](#)みたい……。

[フロアから](#)上映室を覗く依子の横をすり抜けて、隆三はさっそく中央の[恐竜](#)の[模型](#)のほうへ走って行った。依子も後を追った。

[恐竜](#)はティラノ[ザウルス](#)・[レックス](#)で、その[恐竜](#)の背後には蘇鉄の巨大密生林が絵で描かれており、

[恐竜](#)は、[自分](#)の前に立った、ほぼ[自分](#)と同じ大きさの起立した大きな岩山を睨みつけていた。

その三角形の岩山は、上部中央の岩肌がはがれ、その剥がれた表面には透明な塊があるようだった。

よくできたリアルな恐竜の姿に夢中になっている隆三と一緒に、依子は恐竜に睨みつけられたその岩山の下からのぞく透明な塊に目を凝らした。

水晶のようだ。

「未来を覗くことができる「水晶の塔」とやらが。びびびーって。」
幸恵の友人の言葉を思い出した。

これが「水晶の塔」ということなのかしら？・・・。

しかし恐竜のいる時代ならば「過去」だろう。

さては、「水晶の塔」は、過去も未来も覗くことが出来るタイムマシーンという設定なのかもしれない。

そのまま「水晶の岩石」の本体が置かれていれば、もっと目を引くだろうけど。

もっとも、なにも本物の水晶を使うこともないのだから「岩山に覆われた水晶の塔」という、このデザインの根拠は、やっぱり依子にはよくわからなかった。

奇妙なことに、そのティラノザウルスを中心とした巨大なジオラマの周りにも何の解説らしいことも書かれていなかった。

やがて、学校のチャイムのような鐘の音がなり、
「水晶の塔の上映を開始します」とアナウンスが響いた。

「上映室にお入りください。

お子様は前方の大きな椅子にお座り下さい。

大人の方には後方に席が用意してあります。

お子様たちの席の上には、冒険のための魔法のヘルメットが置かれています。

どうぞ、ヘルメットをかぶってご覧ください。」

依子と隆三は、ドアを開ける女性に案内されながら、フロアから上映室に入った。

アナウンスで指示された通り、隆三は、前の席のほうに駆けて行った。

最前列の真ん中あたりの席に座ると、その座席に用意されていたのだろう、

銀色のフルフェイス形ヘルメットを頭からすっぽりとかぶり、
後方の席に座った依子に手を降ふった。

まるで宇宙船にでも乗るかのような大仰なヘルメットだった。
おまけにヘルメットの背後には、たくさんの電線チューブの配線がつながっており、座席に接続されてる。

前面の眼の部分には、赤と青の2色に分かれた眼鏡がはめ込まれているようだ。
子供たちに、その立体メガネをつけるための演出なのだろうが、ヘルメットの背後から座席に接続されているコードは本物のように見えた。

大人の席には簡単なサングラス型の立体眼鏡が置いてあるだけだった。

やがてジリジリと開演のベルが鳴った。

上映室が、少しずつ暗くなり、カラカラと背後で、フィルムの回る音が聞こえてきた。

前方の3面のスクリーンの中央に、「栗本興業株式会社 提供」と大きな文字が表れた。依子も、こちらのローカルTV放送で聞いたことのある栗本興業のテーマミュージックが流れた。

「先進の技術と、確かな絆で、明るい未来を切り開く。 栗本興業が提供します」

その時、ガタリ、と依子の席の下で音がした。

なんだろう？と依子は座席の下を覗き込んだ。

財布でも落としたのかな。

依子の席は最後列で、大人の席が横に5つ並んでいる。

依子はちょうど左端に居て、隣の席には誰もいないので身をかがめて座席の下を覗き込むことができた。

その覗きこんだ座席の下の暗闇に、何か小さな黒い溜りが居た。

猫？

黒い塊の目が2つ光っていた。

依子を見ていた。

「依子、僕が分かるか？」

頭の中に「声」が響いた。

「依子、ここは危険だ。はやく外へ」

黒い塊が動いた。

長い尻尾を引きづりながら、ゆっくりと依子に一步近づいた。

「ぼくが分かるか？」と、その「鼠」が言った。

依子は驚いて、あわてて身を起こし、席に座りなおした。

まっすぐに見た中央の画面には、今、星空が映っており、やがて地球の姿が画面の下に現れた。

「その水晶の塔は、何万年、何億年の昔から、地球にやってきたのです」

画面が地上に切り替わる。画面には、夜の砂漠の上に聳え立つ、巨大な光の柱が立っていた。

「これが、未来を覗くことができる「水晶の塔」です」

続いて、ガタンと大きな足音がすると、3面のスクリーン全体に映像が広がった。

左の画面には、暗闇のジャングルが広がり、その密生林の隙間からティラノザウルスが表れて中央の塔を睨みつけていた。

右の画面には、大きな山があった。天の川のような銀河の夜空を背景に、山は黒い背中を見せていたが、やがて頂上からマグマの赤い筋が流れてきた。

それは流れる血のように見えた。山は轟音とともに噴火を開始した。

右側の画面からは、噴火口から噴き出した岩石と、左側の画面からは、迫る恐竜の顔面の牙が、観客を挟み込むように同時に飛び出すと、観客席からは大きな歓声が上がった。

依子の前に、「水晶の塔」の入り口が迫っていた。

入口は、きらきらと輝く塔の根元にあり、原始時代の岩山の住居のような穴があいていた。その穴の内側にスロープのような坂が見えた。

違う。

あれは偽物だ。

偽物の水晶の塔だ。

「タカマくん」と、依子は呟いた。

「高間君、ここはどこ？」

「しーっ、静かに。さあ、脱出しよう」

「鼠」は、今は、依子の足もとに居た。

「さあ」

「鼠」の声は依子の頭の中に直接響いた。

「ここは、2つ目の[映画](#)だ。依子、覚えて[いるか](#)？」

依子はこっそり立体[眼鏡](#)を外して体をふせたまま、床の先に行く「鼠」の後を追った。

「[ねじ](#)巻依子が[人間](#)に戻って、やってきた「[最初](#)の町」だ。」

行く手にはドアがあった。

「奴らが襲ってくる町だ。いずれ大変なことになる」

依子は静かにドアを開けた。ドアは重かった。[しかしゆっくり](#)と開いた。

「リュウちゃんが」

と依子は上映室を振り返った。

「わかっている。先に行け。ぼくがなんとかする」

「鼠」は答えた。

依子はドアの外に出た。

[フロア](#)は静まりかえっていた。だれも居ないようだ。

中央の[恐竜](#)の[模型](#)が、今は、依子を見ているように見えた。

依子は「出口」と書かれた[スロープ](#)の降り口に向かった。

出口の[スロープ](#)には大きな鏡があった。薄明かりの中で、鏡に依子の姿が映っていた。

「これが私」

鏡の向こうには[少女](#)が立っていた。

[身長](#)は165cmぐらいだろう。中肉中背の体にはこれと言って特徴がない。

地味な白いワイシャツの上に、襟にフリルのついたカーディガンを着ていた。
だぼだぼの大きめのブルーのシーパンに、バスケットシューズのようなスニーカーを履いている。
髪は短く肩のあたりで切りそろえられて、子供のようにふくれたような頬をしていた。
どこにでもいる普段着の女子高生のように見えた。

しかし、今、依子の目は緑色に輝いて、それはまるで暗闇の中の猫の目のようだった。

依子は静かにスロープを下った。下りの壁には、人類の進化の様子が描かれていた。

下りのスロープはまるで地下迷宮への通路のように思えた。

ひどくめまいがした。

鏡に映った自分の姿に、依子は驚いていた。

それが自分であるとは思えなかったからだ。

しかし、では、自分はどういう顔をして、どういう姿だったのか？

それも、今ではなんだかはっきりイメージできないのだった。

自分がまるで別人になってしまって、自分に戻る通路が見つからないかのようだ。

あの緑色の瞳は、わたしの瞳 なのか。

いくらなんでも自分の瞳の色が緑色であったはずがなかった。

瞳の色が変わることなんてことがあるの？

「初期開発段階の、共感覚受容体の長期投与による症例・・・」

「瞳の色を決定する虹彩のストロマに付着するメラニン色素が細かく分裂することにより、短波長の光を多く反射し、多くの場合、ブルー、または、グリーンに変化する副作用が記録」

依子の頭の中の「声」が答えた。

依子は足を止めた。思わずスロープを振り返ってしまう。

なだらかなスロープには隠れるスペースもなく、もちろんどこにも人影は見えなかった。

この「声」はやはり頭の中に直接聞こえているのだ。

"きょうかんかくじゅようたい"ってなに？

「ブレインストームでの通話時に、端末側脳デバイスの受信機能として作用する薬物。またはその作用を示す。内耳にかかる可聴周波数外の超音波に作用し、その信号を、言語化、視覚化するため開発された薬剤」

足もとがふらついた。

わからない。

では、

「きょうかんかく」というのはなんなの？

「一つの知覚の刺激によって別の知覚が無意識に引き起こされる感覚」

では、"ぶれいんすと一む"ってなんなの？

「脳対話装置。brain streaming communication Equipmentの通称」

どうやって・・・脳で対話するの？

「脳デバイスからは、超伝導量子干渉素子により、脳から発生する磁界を検出解析し、脳デバイスへは、頭部ハードウェアからの微細な刺激を、共感覚受容体により 言語化・視覚化することで言語・画像の双方向情報通信が可能」

今の対話が、脳内対話なの？

「その通りです」

私は、だれ？

「アクセスが許可されていません」

なんですって？

「・・・」

私は、だれなの？

「その質問に対して、あなたのアクセスは許可されておられません」

あなたは、だれなの？

「グレープシティ専用中継端局 衛星搭載型アナライザ 型名TE400B」

では、さっきの「しゃべる鼠」は？

依子は、先ほどの館内の席の下でうずくまっていた大きな鼠の姿を思い描いた。鼠の黒い塊の目が2つ光っていた。依子を見ていた。

「依子、僕が分かるか？」

鼠はそう聞いた。「高間くん」と、私は鼠をそう呼んだ気がする。

「アクセスが許可されていません」と頭の中の「声」が答えた。

依子の前方から、突然、若い女性の笑い声がスロープに響いた。

人気のない回廊に響くそのあけっぴろげな笑い声を聞くと、ふと依子は、従姉妹の幸恵の開放感を思い出した。

それが、一瞬、混乱した頭を少し現実の自分の居場所に引き戻してくれたようだった。

しかし笑い声は、従姉妹の幸恵のものではなかった。

それほど無邪気な響きではなく、どこか媚びたような色がある。声の大きさももどこかわざとらしい。心から笑ってるわけではないことが感じられる。

そんな笑い声の主は、意外にも先ほど出口に立って上映の案内を行っていた女性の案内人だった。

下りのスロープの途中には喫煙所がしつらえてあり、そこには広いスペースが確保されていた。通路を挟んで、中央側には、小さなベンチシートが2席並び、平坦で、広く区切られた空間があった。

その周りのテントの外壁側だけには、メッシュパネルの窓が開いており、外気が吹き抜けていた。

ベンチシートには、今、一人の若い男が座っており、笑い声を上げている案内の女性は、その男の前に座って、男の手元を覗き込んでいた。案内の女性は例の冒険者風ヘルメットを座椅子代わりに床に置き、その上に座り込んでいた。

依子には背を向けていた。

ホンモノなのお？ それ？

ひとしきり笑い声を出し切ると、今度は、妙に甘えたような声で、目の前に座る若い男に訪ねている。

若い男は薄笑いを浮かべながら、目の前の女の反応を楽しんでいるかのようなのだ。襟の大きく開いた白いシャツを着ている。

その2人の脇の中央側の壁には、大きなドアがあった。[洗面所](#)だろうか。

そこで、[女性](#)が振り返った。背後の依子の気配を感じたらしい。

あ、[お客様](#)、とあわてて立ち上がり、

どうかなさいましたか。

と、見事に一瞬にして、きびきびした業務用の声と[笑顔](#)に切り替えた。

[若い](#)男は手に持っていた、[女性](#)に見せびらかしていた[もの](#)を、あわてて依子の[視線から背中](#)に隠した。

なんだか気分が悪くなって。と依子は言った。

その奥は、[トイレ](#)ですか？

いいえ。案内係は後ろのドアを振り返った。

ここは映写室なんですよ。一般の[お客様](#)は立ち入り禁止です。

その時だった。

上の上映会場のほうから、[女性](#)の[悲鳴](#)のような声が響いた。

ガタン、ガタンと大きな物が叩きつけられたような音が続いた。

案内の[女性](#)と依子は思わず[スロープ](#)の上を見上げた。先ほどの上映室がその先にある。

なんだあ？ なにかあったか。

白[シャツ](#)の男もベンチから立ちあがった。

上から響く[悲鳴](#)は一つでは収まらずに、今でははっきりと、[女性](#)の[悲鳴](#)と、大人の[男性](#)の怒号のような[もの](#)に変わっていた。

[パニック](#)になったような[女性](#)の[悲鳴](#)の合間に「[ネズミ](#)が」という[言葉](#)が聞き取れた。

[ちょっと](#)見てきな。

と[若い](#)男が、顎で[女性](#)を指示すると、案内の[女性](#)は頷き、[ヘルメット](#)を抱えて[スロープ](#)を駆け

あがって行った。

その上には、まだリュウちゃんがいる。このまま一人で出るわけにわいかない。

依子もその後を追おうとした時、ふいに背後から肩を掴まれた。

白いシャツの若い男の腕だった。

待ちなよ、お嬢さん、あんた。なんだか、妙だな。

依子は肩をすくめた。振り返ると、若い男の舐めまわすような視線が依子の全身を這いまわっていた。

気持ち悪い。

若い男が依子の瞳を覗き込んだ。

ああ。ガイジンかあ？。

粘りつくようなイントネーションの声で、男の息が依子の首のあたりにまとわりつく。若い男の目には好奇な光が宿っていた。

その時、先に駆けあがって行ったヘルメットの案内係の女性が、スロープの上から大きな声をかけた。

なんだか客席に大きな鼠が出たんだって。客が騒いでる。ちょっと来てよ。

ええ？ ネズミだって？

男はあきれたような声とともに「チッ」と小さく舌打ちした。

依子を掴む男の手が緩んだ。

依子が引き離そうと身を振ると、その拍子に男の背後の腰の辺り から黒い塊が床に落ち、ガチン、と金属音が床に響いた。

さきほど依子の視線から隠して、背中に押し込んでいた物だ。

黒い塊は、暗い床をスルスルと滑り、依子を通り越して、その背後に止まった。

自然に依子の目はその塊をとらえていた。

黒い鉄の塊だ。

鈍く光っている。

なに？

「[Colt](#) Government 1911A Model」。

つづけて、また、頭の中の声が答える。

「こると、がばめんと？」

依子はそれが何を意味するのかよくわ**から**ないまま、ついそのまま声に出してしまった。

なにもんだ、あんた。

声に顔を上げると、今度は、[若い](#)男が、先ほどとは変わって、血相を変えて依子の顔を**凝視**していた。

今は男の目はギラギラと強く光っていた。

同時に、[若い](#)男の腕が依子に再び伸びた。

嫌ッ。

依子はその腕を、出来る限りの力で跳ねのけた。

そのまま体を抱え込むようにしゃがみこむと、両目は閉じてしまった。

傾いたスロープの床と、意外な依子の反応に、男は体のバランスを大きく崩した。

依子に腕を伸ばそうと、前のめりになった[姿勢](#)のままバランスを崩し、小さく蹲った依子の体に躓くと、[テント](#)の壁側の窓にそのまま[上半身](#)をつっ込んでいった。

[バリバリ](#)と音を立てて、壁側の[メッシュ](#)パネルの窓が周辺の[ビニール](#)ともに大きく裂けた。

もう少しで、そのまま男の体は[テント](#)の外に放り出されるところだった。男は[スロープ](#)の外周側の手摺にしが[みつ](#)き、なんとか体を止めていた。

蹲った依子が目を開けると、目の前の床に、黒く光るその銃身が見えた。

先ほど男が落とした銃だ。

男はバランスを回復すると、

このやろう、

と低く獣のように唸り、依子を振り返った。

男の背後で、裂けた壁から夜の空気が吹き込んできた。その冷たい風が、男を通り越して、蹲った[姿勢](#)の依子をさらうように強く吹き付けた。

強い夜風にあおられた[テント](#)外壁の[ビニール](#)の切れ端が、[バリバリ](#)と大きな音をたてた。

なにやってるのよ！

騒ぎが大きくなる前になんとかしないと！

上のスロープの影から、案内係の女性の声が響いた。

再び立ちあがった男が、背後から、蹲った依子の背中に手をかけた。
驚いた依り子の手が、反射的に、前に伸びた。

拳銃を拾う。

コルト・ガバメント、1911年モデル。

拳銃のグリップの感触が依子の手に伝わった。

なにしゃがる、返せ、と男の音が驚いたように背後で響いた。
まさか依子が銃を手に取るとは思っていなかったのだ。

依子には、その音は、今度は、ずっと遠くから聞こえたような気がした。

男の手を、再び払いのけると、依子は立ち上がった。

拳銃は驚くほど、依子の手になじんだ。

まるで重さを感じなかった。

「ずいぶん旧式な」と依子は自分が呟く音を他人のように聞いた。

「ずいぶん旧式な拳銃だ」

振り返ると、さきほどの男が、目と口を大きく開いた男が、依子の手の拳銃と、依子の顔を交互に眺めていた。

男は、我に返ると、依子の手の拳銃に視線を釘づけにしながら、

ひゃあ！、

と妙な奇声を上げて、

返せ！と再び叫び、依子の手にしがみついてきた。

依子の目には、その動きはひどく緩慢に見えた。

まるで、[スローモーション](#)のようだ。

突進してきた男の体を避けるために、依子は半身をひねった。

緩慢な男の動作に**対応**するのはわけはなかった。

男の背後に体を入れ替える。

一瞬にして**自分**の前**から**消えてしまった依子の代わりに、男はまわりの空気を掴むようにかきむしるだけだった。

それと同時に依子の背後**から**、短い女の**悲鳴**が上がった。

依子が振り返ると案内係の**女性**が、**スロープ**の上方でしゃがみこんで顔を覆っていた。

依子と、その**女性**の間に、大きな鼠がいた。

いやああ、**お化け**鼠いい、

叫ぶと、**女性**は**スロープ**を這うように駆けあがって行った。

もっとも鼠の方も、そのあまりの反応に驚いたように凝固している。

その姿はどこかこっけいだ。

女性以上に、その**悲鳴**に、鼠のほうが驚いているのが依子にはわかった。

この**アマ**、と低く唸る男の声がして、依子が背後を振り返る。

興奮した白**シャツ**の男が今度は両手を広げて、**下から**依子を囲むように迫ってきた。

反射的に、依子は銃を持った片手を上げた。

両手を添えて、じりじりと迫ってくる男の額に照準を合わせた。

今度は男が固まる番だった。

自分に何が向けられて**いるか**分ると、とたんに男の顔は真っ青になった。

やめろ。本物だぞ。

両手でグリップを強く握ると、**オートマチック**特有の**安全装置**が外れ、依子の手の中を跳ねた。

男は目の前に掲げられた依子のその動作の**意味**が分ったようだ。

あとは引き金を引くだけだ。

やめろ。本物だぞ。

男の声が震えながら繰り返す。

弾も、弾も、弾も、

と何度も口から泡を飛ばすように叫びながらも、もはや言葉にならず、脂汗が顔中にびっしりと浮き上がらせている。

依子は、そのまま、たった一步、男に近づいた。

それで男は顔を覆いながら、その場にへたり込んでしまった。
その場に隠れる子供のように膝を抱いて小さくなる。

ひゃあああ。

空気が抜ける風船の音のような叫び声を漏らした。

「ビッ！ビッ！ビッ！」

依子の耳に、突然、不快なブザー音が響いた。
依子は思わず、片手を拳銃から離し、耳を押えた。

「停止せよ。これは警告である」

依子の前の男は、ぐにやりと脱力したようにその場に倒れていた。嫌な匂いがしていた。男の股間からシミが広がって行く。男は失禁していた。

「その男は、明らかに民間人である」

”グレープシティ専用中継端局 衛星搭載型アナライザ”。
そう名乗った声のようだった。

避けたテントのメッシュの窓から、再び、強い夜風が依子を正面から吹き抜けた。

風が吹きつけるテントの裂け目の向こう側に、三角形に切り取られた星空が見えた。

「あなたの行動は、軍規を違反した疑いがあります」

突然、視界全体の光量が落ちた。

下の曲がり角まで見とされていたスロープも、暗いトンネルの入り口のように闇に飲み込まれた。

「グレーシティより強制的にログアウトされます」

両手の先には急に拳銃の重さがのしかかってきた。

重い。

両手で支えきれないほどだ。

そのせいで、支える両手がぶるぶると震えだした。

支えきれず、つい、ぐらり、と下を向いた銃先にあわせて、何を勘違いしたのか、ひっ、と白シ
ヤツの男の悲鳴が響いた。

男の怯える視線が、懇願するかのように、依子の目を覗き込んでいた。暗がりの中でもその気配だけは感じる事が出来た。

私は何をしているのだろう。

目の前で怯えている男。

その男に拳銃を突きつけている自分。

依子は、この状況に、再び放り出されていた。

私は何をしているの？考えなければ。

必死だった。

どうすればいいの。

こんな時には。

とにかく、この男を追い払わなければ ・・・考えなければ。

どうすればいいの。なんて言えば ・・・

鼻の奥のほうににつんと苦味はしり、目には涙がうかんできた。

これは夢かなにかに違いない。そうだとすると、こんなことには適応できそうにない。もはや一

刻も拳銃を構えて男の前に立っていることなどできない。

どうすればいいの。

意を決して、言葉を口から絞り出す。声は震えている。

「このまま下って、出て行きなさい。妙な真似をしないで。この銃があなたの心臓を狙っていることを思い出すのよ」

そのセリフは、実は、昼間に読んだ従兄の元幸の小説に出てきた文句だった。頭の中に必死で再生した小説の文章を、棒読みしただけのセリフだった。

けれど、それで、目の前の男は、ほっとしたような目をして、四つん這いのまま、スロープを虫のように下って行った。足腰が立たないのかもしれない。

とにかく、そんな男が去る姿を見て、なによりも安堵したのは依子自身だった。

その依子の背後から、今度は、カタカタと音がした。

振り返ると、先ほどの大きな鼠だ。

大きな目をクリクリとさせながら、キーキーと鳴いていた。依子に向かって何かを訴えかけているかのようだった。

私に話しかけようとしているのだろうか。

まさか。

しかし、さっきはこの鼠の声を確かに聞いていたのではなかったのか。「しゃべる鼠」なんて。今となっては、まるで実感が無い。

夢から自分はゆっくりと覚めようとしているのだろうか。

搭の上、依子のいる廊下^{（リンク）}の上方の奥にある上映会場のほうから、女性^{（リンク）}のアナウンスの音が響いた。

「ご迷惑をおかけしております^{（リンク）}。申し訳ありませんが、今回の上映は中止させて頂き^{（リンク）}ます。」

依子は片手に拳銃^{（リンク）}を握ったまま、ただぼんやりとそのアナウンスを聞いていた。

「係の者の誘導に従って、先ほどの入口側から^{（リンク）}、外にお出になってください。料金は入口窓口で全額返金いたします^{（リンク）}」

鼠はキーキーと鳴くのをやめた。静かな廊下^{（リンク）}の上のほう、上映会場から^{（リンク）}、再び人々が動き出す気配がした。

椅子^{（リンク）}を引く音。

ドアを開ける音。

言葉^{（リンク）}は聞き取れなかったが、なにか抗議の声を上げている大人の男の太い声も響いていた。

「君は何者だ？」

今度は、太く、はっきりとした男の声が廊下^{（リンク）}に響いた。

一瞬、依子には、それは鼠の声のように聞こえ、まだこの奇妙な悪夢^{（リンク）}が続くのかと身構えたが、鼠は黙り込んでいる様子だった。

鼠は、上半身^{（リンク）}を起こし、前足を待ちあげて、背伸びをしたようなポーズで立っていた。その視線^{（リンク）}が、用心深く、依子の背後に注がれているのが分かった。

依子が振り返ると、映写室と呼ばれたドアが開いていた。

その部屋から^{（リンク）}洩れた逆光の中に、背広の男が立っていた。

君は何者だ？

男は重ねて尋ねた。

まさか、東から^{（リンク）}来たのか？

それとも、ずいぶん若いところからすると、北からなのかね？

そう言いながら、落ち着いた足取りで、まるで探し物でも探すように、床やスロープの先に目配せしながら、するすると依子に近づいた。

男は鼠を見つけると、一瞬、その場で立ち止まった。

その鼠に視線を向けたまま、諭すような小声で依子に話しかけた。

その拳銃は、元々、私のものだ。返して貰おう。

呆然とただ立ち尽くす彼女の手から、するりと拳銃を取り上げた。

そして、そのまま銃口を鼠に向けた。

グリップを強く握り、セーフティーを解除すると、引き金を絞る。

きっ、と叫び、鼠がはねた。

はねると、今度は廊下の壁側の手摺を伝って駆け降りた。

鼠は依子の脇を走り抜けると、そのまま白シャツの男が破ったテントの隙間から外に飛び出して行った。

裂けた隙間からのぞく星空の、その闇の中に。

次の瞬間には跡形もなく消えていた。

背広の男が、鼠を追って引き金を絞った銃口からは、パチン、と金属がはじける音がしただけだった。

男は拳銃をポケットにおさめた。

男は鼠が飛び出して行った裂け目から外をのぞくと、鼠の消えた跡を暗闇の中に探しているようだった。

その男の顔を、外側の広場からテントを照らしている投光機の光が照らし出した。

男は、サングラスをかけていた。

いや、夜間射撃用のグラスだったか。

黄色い、薄い色のついた、奇妙な眼鏡だ。

その眼鏡には見覚えがあった。男は、やはり、依子がこの搭に入った時に、エントランスに立っていた、奇妙な背広の男だった。

今の鼠の動きを見たかね？

男は依子を振り返った。

まるでこちらの動きの**意味**を知っている**か**のようだ。ふん。ずいぶん、頭のいい鼠だ。

依子に向き直り、**拳銃**を懐ににおさめる。

オートマチックは、**安全**のために1発目は弾を込めないでおく。君は知っているようだったな。それに、あのセリフもなかなかよかった。

「この銃が**あなたの心臓**を狙っていることを思い出すのよ」男の口元が斜めに歪んだ。

そして、くっくっくっ、と鼻の鳴き声のような音を喉**から**響かせた。

笑ったようだった。

上の上映会場のほう**から**、再び、**女性**のアナウンスの音が響いた。

「ご迷惑をおかけしております。

皆さまは、係の者の誘導に従って、先ほどの入口側**から**、外にお出になってください」
料金は入口窓口で全額返金いたします」

こちらに来たまえ。男は先に立って歩くと、上映室に依子を手招きした。

外に出れるよ。この部屋の中には下に降りる**スタッフ**専用の**非常階段**がある。

さあ。

そこの**スロープ**を下って行って、また、さっきの**チンピラ**に**挨拶**に行く**必要**もあるまい。

あれは単なる地元のゴロツキだよ。

栗本に雇われている使い**パシリ**さ。

まあ、見張り代わりにぐらいになるかと思って、私が息を掛けてたんだがね。

男はそう言いながら依子を促した。

心配ない。君の小さな**ボーイフレンド**ならば、じきに無事に出てくるよ。「奴ら」も騒ぎは好まない。

そう言うと、男は先に、上映室と呼ばれた部屋の中へ戻っていった。

部屋のドアを開けるために後ろを向いた男の背中を見た時、
依子は、その男の背中に何かしら見覚えのあることを思い出した。

それは。

そうだ。

今朝、病院帰りの坂を下り、この出し物の天辺にたった影のようなもの。

町を俯瞰していたあの影こそが、この男だったに違いない。

そして、あの時に頭の中に響いていた声を思い出そうとして、しかし、もはやその声が男のものだったか女のものだったのか、

それどころか、

はたして日本語で話していたのかさえ今となっては思い出せないことに愕然とした。

もはや彼女の頭や脳や耳や髪の中からすでに消え去っていて、どこにも痕跡が残っていないようだった。

それでも、「グレープシティ」という言葉だけは覚えていた。

何度もその意味を繰り返し考えていたから。

「グレープシティ」、

「葡萄の町」、

それはこの町そのものを指していると思っていた。

男はドアを開けたまま、明るい部屋の中から依子を手招きした。

なによりも部屋から洩れる明かりが依子を安心させた。

それで依子は男の後に続いて部屋に入って行った。

心配ない、君の小さなボーイフレンドならば、じきに無事に出てくるよ。「奴ら」も騒ぎは好まない。

部屋の天井に吊るされた蛍光灯に照らされた背広の男の姿は、まるでカマキリのように痩せていた。

頭の毛は短く刈られ、大きな耳が両側に羽のように生えているように見えた。

両頬には縦に大きな2本の筋のようなものがくっきりと彫り込まれていて、それは頬の傷のよう

にも、皺のようにも見えた。

「映写室」と呼ばれたその部屋には、映写機らしきものはどこにもなかった。そもそもそこが本当に映写機が置かれた部屋ならば、観客の居る上映室の背後に位置しなければいけないはずで、上映室からスロープで下った位置にあるこの小部屋から上のスクリーンに映写出来るはずがない。依子でもそれぐらいのことはわかっていた。

かわりに、その「映写室」と呼ばれた部屋前面の壁に並んでいたのは、幾つもの記録計の画面だった。

横に5面、縦に3面ほどの数がある。それらがブロックのように積まれて整然と並んでいた。画面の一つ一つが、かたかたかた、と細かな時計のような音を刻んでおり、画面上のグラフ用紙が横に流れていくと、

画面上に置かれた針の先が用紙の上を這いまわって、その上に波形のグラフを描きだしていた。

心電図？。

電子計算機。

コンピュータ。

アナライザ。

依子は再び今朝読んだSF小説に出てきた言葉を思い出した。画面はすいぶんたくさんある。まるで実験室みたいだ。

依子は思わずそれらの画面の前で足を止めた。

男はその依子の脇に寄り添うように立ち、同じように画面を見上げた。

興味があるかね。

観客の子供の脳波を計測しているらしい。

さて、しかしこんな古臭い手法に、どれほどの意味があるのかね。そう思わないか。

それら記録計の画面上には、さらにまた、モニタが5台並んでいてその白黒画面のモニタには部屋の外の様子が映し出されていた。監視用のモニタだろう。依子も銀行やビルの警備室でこんな装置を見たことがあった。

モニタは、塔の入口、登りスロープ口、上映室前のロビー、上映室出口側の鏡。そして、上映室

内全体の5か所を映していた。

[モニタ](#)に映し出されている、上映室内の人々は明るくなった室内で出口へと向かっていた。上映室前の[ロビー](#)には、すでに引き上げようとしている客たちの姿を映していた。

[実験](#)。

[脳波](#)記録計。

あの子供たちに配られた奇妙な「[魔法のヘルメット](#)」。

依子は、その[モニタ](#)の1台の画面の中に、きょろきょろしながら[ロビー](#)を行ったり来たりしている小さな[男の子](#)の姿を見つけた。

リュウちゃん。

依子は思[わず](#)ほっとして声を上げた。

言った通りだろう。男が背後[から](#)再び声をかけてきた。

君はさっさとここ[から](#)姿を消すべきだね。

さあ、

男は部屋の隅にある[階段](#)の踊り場のほうへと依子を誘った。

まるで梯子のような急な階段にしがみつきながら下りきると、ようやく足の先が、でこぼこしたむき出しの地面についた。

電球の橙色の明かりがつき、依子の影をくっきりと描き出した。

その空間は、依子に体育館の舞台袖の物置を思わせた。あるいは舞台下の奈落を。

周囲にはガタガタと板張りのスロープを下る客たちの足音が充満していた。

足音がぐるぐると依子を取り囲んでいるように響いていた。

皆、依子を取り囲むようにしてスロープを降りているのだ。

話し声も聞こえた。

でかい鼠だったなあ いやよくは見えなかったがあの大きさは狸かハクビシンあたりにに違いない。

依子の脇を、どこからか夜の風が吹き抜け、電球が揺れた。そうするとテントの壁に映った依子の影も大きく歪んだ。

依子は顔を上げた。

そこには階段の降り口からこちらを覗き込んでいる例の男の顔が見えた。

依子を見下ろすその視線は、まるで実験動物を檻の外から観察しているようだ、と依子は感じた。

。

依子はじりじりと男の視線から後ずさりながら、夜風が吹く込んでくる出口へ向かった。

そうして依子が出た場所は、ちょうどスロープ入口の脇の裏側だった。

あの男を初めて見た場所だ。

スロープの上からはヘルメットをかぶった案内係に従って、

まるで避難訓練かなにかのように誘導された観客たちがぞろぞろと降りてきていた。

何事もなかつたかのうな顔をとっさに繕って、依子はその列にまぎれると、

ほとんど同時に「ヨリちゃん！」と大きな声が背後からした。

振り返ると、バタバタとこちらに駆け寄ってきたのが隆三だった。

その笑顔を見ると、思わず依子も駆け寄って思い切り抱きしめたい衝動にかられたが、疲れ切ったような、別の子連れの子供たちの顔が目に入ると、冷静さを必死で保った。せっかく脱出したこの場所で、周囲に目立つような真似をしたくなかった。

さきほどの出口側スロープで、依子と逢った案内係の女性も、この列を誘導するためにどこかに居るに違いない。

ああ、よかった、迷子になったのかと心配したんだよ。

駆け寄ってきた隆三が息を弾ませながらそう言った。

まったく、さっさと逃げちゃうんだもの！

隆三のその言葉に周囲の子連れの子供たちが失笑しているのを感じた。

しかしそんなことはお構いなしに依子は顔を俯いたまま急ぎ足で隆三の手を引いて塔の外に出た。

今は、少しでもこの場所から離れたかった。

その時、「ドドーン！」と地を揺るような低音が響き、空が一瞬にして光に満ち溢れた。

その場にいた者たちが一斉に空を見上げた。

青い大きな光の花が空一面を覆っていた。

花火だあ、と隆三が大きな声を上げてはねた。

花火の光が周囲を照らし出すと、「水晶の塔」の前面屋根に飾りつけられた大きな目玉の模型が依子を見下ろしていた。

そして、その少し上に位置するテントの一角に、表面のビニールが三角形に破れて、その切れ端が、ただれた皮膚のように垂れ下がっている場所が見えた。

あれは下りスロープの、映写室前の踊り場にあったメッシュ窓の部分に違いない。

あの白いシャツの若い男が破いた部分に違いない。

依子はからからに喉が渴いているのを感じて、ごくりと唾を飲み込んだ。

私は帰って来たんだ。

あの奇妙な出来事から。

あの場所から。

こうして無事に。

そして一刻も早くここから立ち去りたかった。

依子は再び顔を俯いて隆三の手を引いた。

突然、ヨリちゃん！ リュウちゃん！、と、

その前方から声がして、顔を上げると、そこには浴衣姿の幸恵が立っていた。

幸恵は両手で大きな箱を抱えていた。

・・・ああ！、ユキちゃん！

それで依子も、今度こそ我慢できずに駆けだして、そのまま幸恵に抱きついてしまった。

・・・ああ！、ユキちゃん！

声にならないような嗚咽が喉からあふれた。幸恵の浴衣の上から力任せにしがみついてしまった。

幸恵は、あわてて、そんな依子を受け止めたために、かわりに両腕で抱えていた荷物を地面に落してしまった。

・・・・どうしたのさ。そんなに怖かったの？

背後に居た里美が驚いて幸恵の荷物を拾い、依子の顔を心配そうに覗きこんだ。

違うんだよ、お化け鼠が出てさ。大騒ぎさ。後ろから隆三が解説している声が聞こえた。
映画館の中でさ。中止になって、みんな出てきちゃったんだよ。

バカね。

幸恵は依子をそのまま抱きながら、しばらく依子の背中をなでていた。

ヨリちゃんが鼠ごときを怖がるはずないでしょう。

蛇でも仲間になれるヨリちゃんが・・・。

なにかあったんだね？

しばらくして依子が我に返ると、落とした荷物を抱えた里美も、こっくりうなずきながら微笑んでいた。

さあ、とにかく帰りましょうか。

ああ・・私のせいで、荷物が・・・ごめんなさい・・・

ああ、これね。

今度は幸恵と里美は顔を見合わせて笑った。

地元の友達がね。

上の神社でやっていた、「のど自慢」で特別健闘賞で獲得した商品なんだ。

「のど自慢」で、獲得したのは男の子なんだけどね。

でも、商品は、「女物の和服」だ、なんて言うから貰って来たんだけど。

見てみる？

そう言うと、幸恵は荷物の箱を開けて見せた。箱の中には、い大きなタオルのようなものが折りたたんであった。

真っ赤な、、、和服？

まあ、確かに「女物の和服」には違いないよねえ。幸恵はそう言いながらその服を案外ぞんざいに広げて見せた。

まるで「ツナギ」のような、赤くて長い丈の服が、依子の目の前に広がった。

なんだかわかる？

いたずらっぽく里美も尋ねる。

これね。

「女忍者」の衣装なのよ。

いや「九ノ一（くのいち）」と言うべきか。

笑いながら、幸恵が衣装の向こう側から顔を出した。

のど自慢のアトラクションで使った衣装なんだ。なんだかセコイよねえ。

でもおもしろかったんで貰ってきてやったんだよ。

幸恵と里美は顔を見合わせて笑った。

そういえばおかしなアトラクションだったね、あれは。妙な名前の女忍者でさ。

なんだっけ？

その時、突然、突風が吹いた。幸恵の手にした衣装が風でめくれ上がって、依子を呼ぶように広がった。

「ねじ巻依子」と里美が答えた。

宣伝してた映画の主人公の名前なんですよって。

風で再びあおられて、バタバタと、赤い衣装が大きくはためいた。

その様子はまるで依子に手を伸ばしたかのようにだった。